International

グローバル・ダイアログ: 国際社会学会ニューズレター 第5巻 第4号(2015年12月) 季刊誌を16カ国語で刊行

GLOBAL 5.4

混乱の権利

フランシズ・フォックス・ピヴェン

イスラム国の魅力

フランソワ・ブルガット

社会学と人類学

ヤン・ブレマン

オーストリアの公共社会学

ルドルフ・リヒター

変化するキューバ

- >米国とキューバ
- >人種主義と革命について
- >変革時代のキューバ清掃人

台湾社会学

- >太陽花学生運動
- >労働運動と環境運動
- >圧縮されたパレントフッド
- >台湾崩壊のメイキング
- >台湾社会学の発展
- >街角の社会学

追悼

>ユルゲン・ハートマン, 1944-2015



ttp://isa-global-dialogue.net 第5巻/第4号/2015年12月





>編集部より

学際性と学問領域

季号は2つのインタビューから始まる。最初のインタビューはフランシズ・フォックス・ピヴェンである。アメリカ社会学史上、著名な学者の1人である。社会福祉の権利、投票者登録、直近ではオキュパイ運動に真摯な取り組むことで、混乱の力という、彼女独自の社会運動の分析につながった。彼女の長いキャリアを振り返ると、さまざまなことがあった。ミルトン・フリードマンとの議論に恐ることなく挑んだこと、右翼の政治評論家の敵意の矛先となることもあった。2つ目のインタビューはフランスの中近東研究者のフランソワ・ブルガットで、イスラム国がヨーロパのムスリム教徒に魅力的に映ることを説明する。ムスリム教徒は母国で人種的排除に直面している。次は、オランダのインフォーマル経済を専攻する著名な社会学者ヤン・ブレマンの論考である。この論考で、彼は人類学と社会学の複雑な関係を紐解く。3人の社会学者は社会学に足を入れているかもしれないが3人とも公共の問題に取り組む上では、学術分野の垣根は重要ではないことを、政治学、人類学、歴史、社会学に触れることで主張している。

キューバに関する寄稿にも同様のことが言える。ルイス・ルンバウトと ルベン・ルンバウトは、和解へと導いた度重なる地理政治的・経済的な圧力に着目しながら、キューバとアメリカの間の歴史的合意を考察する。一方、ルイサ・スチュアーは、低賃金の清掃人という視点を取り上げることで、キューバとアメリカの和解の意味について考察する。彼女はソビエトの市場経済への移行について造詣が深い。キューバでもソビエトと似たような変化が起こることで、今まで表面化することのなかった格差が深まると、彼女は考えている。これに続く論考では、ルイサ・スチュアーはアフリカ系キューア人のノルベルト・カルボネルにインタビューした内容をまとめている。カルボネルは政党に忠誠的な人物である。しかし、キューバの人種主義にを赤裸々に語っている。1年前であったら、このようなインタビューを載せることは難しかっただろう。

学際的になるには学術分野が必要である。社会学はグローバル分野の影響を受けつつも、国家という枠組みの中で展開している。この点は、台湾からの6つの論考で指摘されていることである。中国とアメリカの間で保留された小さな島には、不穏な社会運動の歴史があることから、アジアでは最も活気のある社会学を生み出した。武力による国民や国家の征服の歴史があり、地理政治学に過敏な国家であることから、新たなグローバル社会学のアプローチ法が掻き立てられた。台湾の寄稿者の多くは、1990年代の民主化運動に参加しており、社会運動については異なる見解をみせている。論考の中で記されているように、最近起こった太陽花学生運動は、社会学と批判的なビジョンを全国レベルで知らしめることになった。社会学が学術界を越えて一般市民との係わる契機となった。

ルドルフ・リヒターのオーストリア社会学の歴史の論考の中でも、パブリック・ソシオロジーは取り上げられている。彼の論考は、2016年7月10日から14日にウィーンで開催される第3回社会学フォーラムをISA会員に紹介するシリーズの第一弾である。オーストリアの開催地実行委員会がブログを開設することで、オーストリア流に歓迎している。http://isaforum2016.univie.ac.at/blog/

>『グローバル・ダイアログ』は16カ国語に翻訳されており、ISAウェブサイトで閲覧・ダウンロードできます。

>寄稿の送付先: burawoy@berkeley.edu



フランシズ・フォックス・ピヴェン 輝かしい経歴のあるアメリカ社会学者。ロレーヌ・メナイトとのインタビューの中で、自身の 社会運動理論を論じる。



フランソワ・ブルガット 中近東研究者。 サリ・ハナーフィとのインタビュ ーの中でイスラム国の魅力について語る。



ヤン・ブレマン 著名なオランダ社会学者。社会学と人類学の 奇妙な関係について考察する。



ルドルフ・リヒター 2016 ISA 社会学フォーラム 開催地実行委員 会委員長。オーストリア公共社会学のレガシ ーの詳細を語る。



『グローバル・ダイアログ』は、SAGE 出版社の助成金のもと、発行してお ります。

>編集委員会

委員長: Michael Burawoy.

副委員長: Gay Seidman.

専門委員: Lola Busuttil, August Bagà.

Consulting Editors:

Margaret Abraham, Markus Schulz, Sari Hanafi, Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Rosemary Barbaret, Izabela Barlinska, Dilek Cindoğlu, Filomin Gutierrez, John Holmwood, Guillermina Jasso, Kalpana Kannabiran, Marina Kurkchiyan, Simon Mapadimeng, Abdul-mumin Sa'ad, Ayse Saktanber, Celi Scalon, Sawako Shirahase, Grazyna Skapska, Evangelia Tastsoglou, Chin-Chun Yi, Elena Zdravomyslova.

地域委員

アラブ世界:

Sari Hanafi, Mounir Saidani.

ブラジル

Gustavo Taniguti, Andreza Galli, Ângelo Martins Júnior, Lucas Amaral, Rafael de Souza, Benno Alves, Julio Davies.

コロンビア

María José Álvarez Rivadulla, Sebastián Villamizar Santamaría, Andrés Castro Araújo.

インド:

Ishwar Modi, Rashmi Jain, Pragya Sharma, Jyoti Sidana, Nidhi Bansal, Pankaj Bhatnagar.

インドネシア:

Kamanto Sunarto, Hari Nugroho, Lucia Ratih Kusumadewi, Fina Itriyati, Indera Ratna Irawati Pattinasarany, Benedictus Hari Juliawan, Mohamad Shohibuddin, Dominggus Elcid Li, Antonius Ario Seto Hardjana.

イラン:

Reyhaneh Javadi, Abdolkarim Bastani, Niayesh Dolati, Mohsen Rajabi, Vahid Lenjanzade.

Satomi Yamamoto, Fuma Sekiguchi, Shinsa Kameo, Kanako Matake, Kaho Miyahara, Yuki Nakano, Yutaro Shimokawa, Masaki Yokota, Sakiye Yoshioka.

カザフスタン:

Aigul Zabirova, Bayan Smagambet, Daurenbek Kuleimenov, Gani Madi, Almash Tlespayeva.

ポーランド:

Jakub Barszczewski, Mariusz Finkielsztein, Weronika Gawarska, Krzysztof Gubański, Kinga Jakieła, Justyna Kościńska, Martyna Maciuch, Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska-Zając, Adam Müller, Patrycja Pendrakowska, Zofia Penza, Teresa Teleżyńska, Anna Wandzel, Justyna Zielińska, Jacek Zych.

ルーマニア:

Cosima Rughiniş, Corina Brăgaru, Costinel Anuţa, Telegdy Balasz, Adriana Bondor, Roxana Bratu, Ramona Cantaragiu, Alexandra Ciocănel, Alexandru Duţu, Ruxandra Iordache, Mihai-Bogdan Marian, Ramona Marinache, Anca Mihai, Radu Năforniţă, Oana-Elena Negrea, Diana Tihan, Elisabeta Toma, Elena Tudor, Carmen Voinea.

ロシア:

Elena Zdravomyslova, Lubov Chernyshova, Anastasija Golovneva, Anna Kadnikova, Asja Voronkova.

台湾:

Jing-Mao Ho.

トルコ:

Gül Çorbacıoğlu, Irmak Evren.

メディア・コンサルタント: Gustavo Taniguti.

編集コンサルタント: Ana Villarreal.

>目次

編集部より: 学際性と学問領域	:
混乱の力 - フランシズ・フォックス・ピヴェンとのインタビュー ロレーヌ・C・メナイト、アメリカ	4
イスラム国の魅力 - フランソワ・ブルガットとのインタビュー	
サリ・ハナーフィ,レバノン	7
ヤン・ブレマン,オランダ	10
オーストリアの公共社会学のレガシー	
ルドルフ・リヒター,オーストリア	13
〉変化するキューバ	
米国とキューバー仲直りは困難	
ルイス・ルンバウトとルベン・ルンバウト、アメリカ	15
人種主義と革命について - ノルベルト・メサ・カルボネルとのインタビュー	
ルイサ・スチュアー,デンマーク	18
ハバナからの大きな知らせ	
ルイサ・スチュアー,デンマーク	2
〉台湾社会学	
太陽花学生運動と四面楚歌の台湾社会学	
何 明修,台湾	23
どちらが先?労働運動?それとも環境運動?	
劉 華真,台湾	2.
台湾の圧縮されたパレントフッド	
藍 佩嘉,台湾	28
崩壊のメイキング - 21世紀の台湾	
林宗弘,台湾	30
台湾社会学の発展における普遍性と特殊性	
張 茂桂, 台湾	32
街角の社会学	
王 宏仁,台湾	34
→追悼	
ユルゲン・ハートマン, 1944-2015 - 熱心な国際主義者	
リュミドラ・ナース,イギリスとシルビア・トルンカ,オーストリア	30



〉混乱の力

フランシズ・フォックス・ピヴェンとのインタビュー

フランシズ・フォックス・ピヴェン(以下、 FP)は国際的に著名な社会科学者で、皆に愛される教師である。彼女はラディカルな民主主義者であり、学者でありながら活動家でもある。貧困層を擁護する勇敢な活動には目をみはるものがある。Richard A. Cloward (リチャード・A・クロワード) との共著 Regulating the Poor: The Functions of Social Welfare (1971)は学術論争に火を灯した。彼女の初めての学術書だが、社会福祉政策分野の在り方を再考することつながった。継続研究課題の中で彼女は、貧困層の崩壊活動が近代アメリカ社会福祉国家の礎を築いた (Poor People's Movements, 1977)こと、この活動はプログレッシブな社会政策と政治改革を押し進める上で必要だった(The Breaking of the American Social Compact, 1997; Challenging Authority, 2006)ことを論じている。彼女は常に自らの学術研究を、政治的な仕事にリンクさせており、社会福祉権の運動や投票者登録を促す運動を起こしたパイオニア的存在である。また、公然とオキュパイ運動を支持した人物でもある。彼女はメディアを前にしても、自分の考えを曲げることはない。テレビ討論では、自由主義経済学者のミルトン・フリードマンに拮抗する著名なライバルとして争ったこともある。彼女は数多くの賞を受賞し、表彰もされ、アメリカ社会学会会長(2007年)を務めたこともある。インタビューの中で彼女は、"interdependent power" (相互依存の力)という独自の理論の詳細を説明する。この理論は、彼女の研究業績の根幹となるものである。アメリカ合衆国の政治学者ロレーヌ・C・メナイト(以下、LM)(ラトガース大学)は、2015年5月30日にピヴェンをインタビューした。



LM:崩壊について伺いたいのですが、「混乱」はあなたが初めて出版した論文 "Low Income People in the Political Process"と1966年にThe Nationにリチャード・クロワードと共著した "The Weight of the Poor"という評判の悪い論文に舞い戻るテーマです。混乱というテーマは、あなたの研究業績の中で幾度となく登場します。今日、我々は混乱をよく耳にします。ハイテク起業家は他産業を、自らの利益のためと、単に面白いからという理由で「混乱」させようとし、社会運動の分析家もこの言葉をよく用います。長年に渡り、あなたの最大の関心事となっているので、社会理論において混乱とはどのような意味なのかを説明していただけますか?

FP: その言葉は頻繁に用いられますが、十分に注意を払って使われているとは思いません。技術産業では市場を乱すイノベーションという意味で、社会運動の学者にとっては騒々しく、秩序を乱し、暴力的な集団行動という意味で、この言葉を用いています。しかし、騒音と無秩序だけでは、混乱が底辺の人々に、時折、何らかの力を付与することは説明できません。

私の初期の頃の業績に触れられましたが、この2つの論

フランシズ・フォックス・ピヴェン

文は、黒人貧困層(ニューヨーク市で、プエルトリコ人)による 抗議運動が起こっている最中に書いたものです。確かに、 抗議運動は騒々しく、秩序を乱すものでした。なぜだろう、と 思いました。1960年代初頭になると、アメリカの都市部に南 部の田舎やプエルトリコから、多くの人々が移住してきまし た。当然ですが、豊な生活を求めたのですから。もちろん、 彼らは非常に貧しかった。都市部の労働市場では良い仕 事が見つからないことに、彼らは気づきました。地方政府は 福祉サービスの提供を断りました。だから、人々は集まり、 行進し、叫び、市議会の芝生にゴミを投げつけたのです。 そして、その反応として、リベラルな白人達は、その多くは社 会福祉の専門家ですが、このように言ったのです。「あなた 方の目標には同意しますが、目標を達成するための手段に は同意できません。確かに、仕事に就けて収入があった方 がいい。健康保険にも加入でき、アパートには暖房があり、 蛇口から湯がでたほうがいい。でも、騒音や暴動を起こすこ とで、このような問題は解決できない。あなた方がすべき事 は、団結し、投票し、代表者に嘆願してもらうことだ。」実際 に言った言葉ですよ。要するに、通常の民主主義的な手段 に打って出るべきだと。

私は、この言葉に困惑しました。そして、暴動を起こした 人たちは、自分たちが出来ることを実行しただけだとの結論 に達したのです。なぜなら、白人の仲間のアドバイスは的外 れだったからです。実際、通常の政治的プロセスでもって、 格差是正を試みた人たちは多くいました。市庁舎に出向 き、微力ながらも、訴えた人たちも多くいました。しかし後に なって、生活保護などの社会福祉サービスを申請しても、適 切に処理されていなかったことがわかったのです。

つまり、人々が暴動という手段に打って出たのは、彼らに とってこの方法が一番効果的だったからだとです。低所得 者層の人々が、なぜ暴動を時々起こすのかという質問に対 する、私の最初の見解です。実のところ、貧困層は静かにし ている時の方が多い。しかし、貧困層が政治的場面に現れ ると、無秩序であることがよくみられました。

徐々にですが、リチャード・クロワードと共に、混乱と呼ばれる行動を深く理解する上で有効で、分析的だと思えるものを作り出しました。この論点の内容の真価を問うには、観察対象者は特有の行動をとるという前提条件をはずさないといけません。そして、次の質問を考えてみましょう。「社会を構築する相互依存関係という複雑な構図の中で、貧困層の役割な何なのか?また、社会を構築する協同関係に基づく複雑な網の目の中で、彼らはどのような役割の担っているのか?言い換えれば、労働分業の中で、どのような役割があるのか?」

LM: デュルケーム系の考え?

FP: ええ、デュルケームの影響は大きく受けました。

人々が自分たちの役割を拒否し、破壊的な行為を起こすことで、どのような結果がもたらされるのか?おそらく、混乱は絶望から生まれるのではない。権力の源なのです。

これが論旨です。「貧困層は(社会から)排除されている

と言われるが、そうではない。彼らは社会の一部であるが、 従属させられ、搾取されるために、社会の一部となっている のである。貧困層は重要な役割を担っている。例えば、家 庭内労働者、住み込みのベビーシッター、介護者、家政婦 などの役割である。つまり、ゴミ収集者、ファーストフードの 店員、小売店の店員、清掃員などの仕事である。ここ数十 年の間、パート雇用、オン・デマンド雇用、契約雇用が広ま ることで、この種の職業の不安定さが増す一方、賃金も低下 している。」

しかし、このような労働者は無力なのでしょうか?ニューヨーク、ロンドン、サンフランシスコ、ボストンの家庭内労働者について考えてみましょう。子供の世話をし、アパートを掃除し、高学歴、高賃金、高収入の専門職や管理職の女性の代わりに夕飯を作ります。家政婦とベビシッターが手を止めてしまうと、弁護士、会計士、金融経済をまわしている管理職に影響が及びます。

つまり、家庭内労働者には一種の力があるのです。なぜなら、彼女達が仕事に来なければ、雇い主は仕事に出かけることができないからです。家庭内労働者が拒否するということは、為替制度という装置の中の、ある種の勇気の表れなのです。私が話している混乱とは、この種のことを指します。相互依存関係のもとで成立している複雑なシステムから抜けるということです。つまり、ストライキと同じ効果があります。協力者がいなくなることで、システムは塞がれてしまいます。全てが停止することはないでしょうが、よく機能しなくなります。物事を閉鎖してしまう力は、歴史的に最下層の人たちが持っており、彼らの力の源でした。つまり、相互依存的な崩壊力です。

LM: Poor People's Movementsの中で、社会改革を図り福祉国家を建設する上で、大衆暴動は重要な役割を担っていると論じています。混乱の理論という観点から、今日の状況をどのように評価しますか?自らの生活を向上する上で必要な力のある貧困層については、どのように思われますか?

FP:大概、人々は代表選挙制度とは、自分たちの望みを叶えるための領域だと考えています。もし、自分の望みがわかっているとすればですが。しかし、最下層の人々にとって、選挙政治は有効だとは思えません。それどころか、ほとんどの人には有効ではないと思うようになりました。なぜなら、アメリカ合衆国の選挙政治は腐敗し、ヨーロッパでは国がすべき決断を、超国家的機関が行っているからです。超国家的機関は国家より優位な立場です。それにもかかわらず、選挙制度を無視することはできません。選挙の成功、または失敗を決めるのは、選挙政治に対する反響なのであるから。

確かに、選挙代表民主制は非常に制度的です。相対的 平等という領域を作り出します。この領域では、大半の人々 は定期的に実施される選挙に投票できる。そして、国家、 政府の重要な意思決定者らは被選挙者の前では脆弱にな るのです。つまり、有権者によって支配層のエリートは議会 から押し出され、権力がなくなる可能性がある。選挙代表民 主制は、人々は組織化する権利も保障しています。そのた め、多くの有権者が個々人のレベルで集団的な声を高める ことが可能なのです。

選挙代表民主制の基礎的特性の中には、さまざまなバリエーションがあります。そして、このバリエーションは重要です。この制度は社会生活の領域を作り出します。つまり、全ての人々にトップ層が頼りとする資源があるという社会生活領域。そして、その資源は、原則として、大なり小なり平等に行き渡っているのです。

問題点は明らかです。この平等領域と、格差がみられる他の社会領域との間は塀で遮られていない。必然的に、他の社会領域からの格差は溢れ出し、平等が保障された選挙領域に流れ込み、この領域で実施されていることを乱すのです。アメリカ合衆国の状況は、ますます悪化している。これは最高裁のCitizens United v. Federal Election判決(選挙運動に携わる集団への献金を制限する法律の判決を覆した)が出されたためです。現在では、何十億ドルもの金が選挙活動に費やされています。さらに選挙代表民主制も歪曲されています。投票数を代表に転換するシステムもも非常に歪曲されています。(これを可能にしているのが、アメリカ憲法なのですが)。しかし、今日ほど、ロビイストが立法府委員会で議論に参加し、定期的に政治家を買収するのが、定期的にみられるようになったことはありません。

しかし、私の論点は今は違います。選挙代表民主制という 輝かしい考えは、政界のエリートと多くの投票者で構成され た相互依存に依拠していることに気づいてください。

一般的に、運動を起こす時、活動家は、面倒を起そうとする前に、政治改革をする候補者を選出すべきだと言う人が多くいます。一方、社会運動家は選挙政治をも含めて全て冷笑します。どちらも、たとえ実社会を歪曲していたとしても、選挙政治が運動に影響し、時折、運動の源となる破壊的効果を生み出せる力があるのを認めていません。

政党と候補者の組織団体は、主流派を作ることで選挙に 勝とうとします。このために、集団を分裂させたり、財政面を 支援してくれそうな人々を遠ざけるような問題を、もみ消しま す。運動が起こると、政党と候補者は、これに関係する問題 だけを取り上げるようにします。運動支持者からの票が必要 な政治家は、新たな要求をそらそうとします。政治家は「もち ろん、人種統合は重要だと考えています。しかし、徐々にし ていかねばなりません。」と言うでしょう。当然、徐々にと言っ たとしても「徐々に」という状態が永遠に続くのです。つまり、 人種統合は永久に訪れないことを意味します。政治家が要 求をなだめようとする事実そのものが、おそらく、運動で希 望や切望が叫ばれることで、選挙政治に何らかの影響をも たらすというメッセージなのかもしれません。そして、運動が 強化され、この勇気によって動かされるとき、民主党の政策 が市民権運動を支持した時のように、運動はさらに強化さ れ、エスカレートするでしょう。

運動がエスカレートするに従って、選挙で勝利するために多数の投票者ブロックと、選挙活動を支える資金を必要とする政治候補者にとって、運動が彼らの脅威と成り得ます。 運動が成功するのは、分裂を抑えようと政治家が譲歩する からです。

LM: あなたの混乱の理論、相互依存力の理論、選挙状況でしだいで、運動が改革を図ることができるという理論は、あなたがアメリカ史に精通され、ご自身が1960年代にニューヨーク市の福祉権運動に携わった経験から展開されたものです。この理論を用いることで、他諸国の政治展開について、どのように解釈することができるのでしょうか?

FP: 他諸国の事例にも当てはまります。しかし、アメリカの厳密な二党政治システムは、特に運動に直面すると脆弱かもしれません。ギリシアでの暴動は全ギリシャ社会主義運動を破砕し、急進左派連合スィリザの勝利を可能にしました。

LM: 現代の運動と選挙の動向は、バラック・オバマの 当選について、どのように説明できますか?また、革 新的社会改革の限界については、どのように説明でき るのでしょうか?

FP:オバマ支持者は主に若者とマイノリティです。オバマが就任したのは金融景気が著しく後退した時でしたが、大小規模を含めて運動は起こっていません。

オバマ支持者は、フーバーの次に大統領に就任し、ニューディール政策を立案したフランクリン・デラノ・ルーズベルトに、オバマを準えようとしますが、今振り返ってみると、オバマ政権はフーバー政権と似ています。フーバーは1929年の世界大恐慌の時期に任期を務めた共和党の大統領です。1930年から1931年にかけて暴動がありましたが、小規模なものでした。この時代に何が起こったかを調査し、何を学べるかに気づくには時間がかかるでしょう。

1930年代初頭から、大きな暴動が勃発し始めました。大恐慌の後も数年続き、フーバー政権が繰り返し景気は回復しつつあると発表したにもかかわらず、暴動は数年続きました。

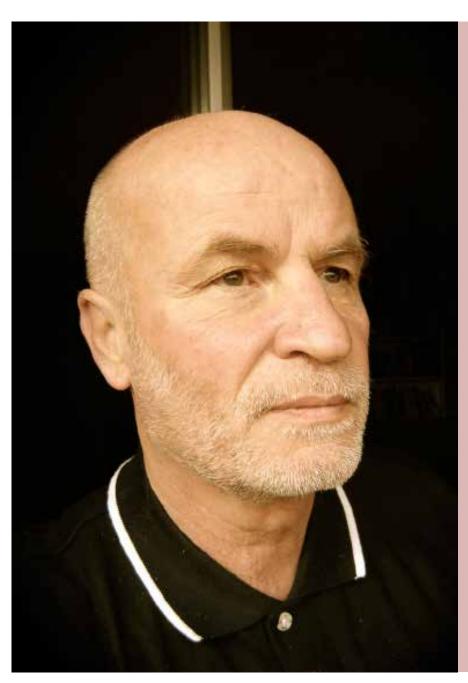
2008年も同様です。確かに、選挙活動に携わるMove-on folksという若い活動家もいましたが、抗議運動は起こりませんでした。ウィスコンシン州の学生運動、労働運動、オキュパイ運動、Fight for Fifteen運動(生活できる賃金を求める運動)、Hands Up, Don't Shoot運動(警察の人種差別に反対する運動)、これらは全て発展する時期に来ています。当然2008年に、この運動が起こっていたとしたら、オバマは今よりも良い大統領だったと思います。2015年の現在の運動ですが、低賃金労働者の抗議運動や警察当局に対する抗議運動が、確かにエスカレートしています。この運動が、アメリカ全土に広まることを願うべきです。クリントン政権がこれを看過できなくなるからです。

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Frances Fox Piven <<u>fpiven@hotmail.com</u>>と Lorraine Minnite <<u>|minnite@gmail.com</u>> までお寄せください。

ンイスラム国の魅力

フランソワ・ブルガットとのインタビュー



フランソワ・ブルガット(以下、FB)は政治社会学者で、フランス国立科学研究センター(CNRS)のシニア研究員である。彼はアラブ世界の政治システムと市民社会の分析に生涯を捧げてきた。彼はイスラム教徒の運動を贔屓目で見ることなく、また中傷することなしに理解することができ、主流の解釈に勇気を持って立ち向かう珍しい学者である。現在、欧州研究会議のプロジェクトである"When

Authoritarianism Fails in the Arab World"の研究代表者である。最近の著書には Pas de printemps pour la Syrie: Les clés pour comprendre les acteurs et les défis de la crise, 2011-2013 である。フランソワ・ブルガットは、ベイルートのアメリカ大学で教鞭を執り、ISAナショナル・アソシエーションの副会長であるサリー・ハナーフィ(以下、SH)からインタビューを受けた。

フランソワ・ブルガット

014年9月から、イスラム国(IS)は、「永久的か つ拡大中である」と宣言している。国際的な空 爆作戦が行われたにもかかわらず、残念なが ┛ ら、これはイラクとシリアの現状を反映されて いる。この拡大は、必ずしも勢力が併合しているという 意味ではない。ISが設立しようとする「スンニランド」は、 その地域だけでなく、占占領された人たちの間でも反 対がある。2014年の終わりに、CIAは2万から3万5000 人もの戦闘員が、イラクやシリアでのISの支配地域を 守っていると推定した。しかし、別の推定では20万人 もの戦闘員を配置しているという。この拡大は、抑圧的 行政の失敗という、この地域の状況と、イデオロギーの 相違とが関係している。事実として、ISとその関連組織 は他の国々に軍事行動をしている。つまり、1500人の フランス国民を含む6000人以上のヨーロッパ人がシリ アへ戦いに行くという、世界的な現象になっている。ヨ ーロッパ人をISに誘う人たちの大半はムスリム教徒達 だが、ムスリム教徒へと改宗した人もリクルーターとして 活躍している。以下のインタビューでは、ヨーロッパ人 がISに入る動機について、フランソワ・ブルガットが分 析している。

SH: ISは国境をなくしたり、帝国を築くなどして、新しい政治的構想を地域にもたらしています。これは若者を引きつける何かだと、あなたは思いますか?

FB:はい、明らかにそうといえます。惹き付ける動機は多くて多様ですが、それでも我々は最も一般的な例を示すことができます。幅広い動機を明らかにするために、私は2つのカテゴリーを紹介します。1つ目はネガティブな動機。生まれた環境からの拒否です。例えばフランスの環境などが該当します。2つ目がポジティブな動機。個人がISの世界に引き込まれることです。

ポジティブ、そしてネガティブな動機の詳細を探る前に、そういったISの魔力の真相について考えてみましょう。つまり、「イデオロギー的」「宗教的」な変数に着目し、全ての罪を「イスラム過激派」に負わせることです。一般的に信じられているのは、若者がサイイド・クトウフの著書を読み、または郊外の奥地で「過激な」イマームに出会うこと、よく言われるのが、インターネットのウェブを見ることで、過激な思想に染められるということです。

私から見れば、この(イスラム教の) 語彙は過激化のプロセスを速められますが、これでは個人の内面の変化を説明することができません。過激化の世界史から、反逆者の語彙は、彼らの反乱の原因と混同すべき

でないということが理解できます。宗教やドグマにかか わらず、反乱を起こしたいと考えている人間は、いつで も、そのように表現することができ、また彼らの行動を 正当化するために、宗教的な、もしくは世俗的な象徴 物を探しています。イスラム思想的なジハーディストに よる暴力の解釈は、西洋では人気があります。なぜな ら、イスラム思想の中に罪を見つけることは(非ムスリム 教徒)の観察者が、自らの責任を否定することができ るからです。このような議論の背後には、しばしば「教 育上の誤解」があります。ジハーディストが「正しいスー ラ」を読んでいなかった、もしくは「十分に、徹底的に」 読まなかった、また何を読んでいるのかを理解してい なかったということが示唆されるのです。これらの全て は、イスラムの世界での過激派による悲惨な影響を意 味しています。そして、それは地球規模で広がり、数 百万ものムスリムの宗教教育を完璧に行うことで、消し 去ることができます。このようなアプローチの限界を説 明する必要はないでしょう。

SH:では、あなたが先ほど言及していたネガティブな動機に戻ってみましょう。

FB:ネガティブな動機は、自分が生まれた社会からの世界的な排除に火種を持つ、ジハーディストの「世界から拒絶されている」という気持ちに焦点を当てることで説明ができます。このようなジハーディストたちは、しばしば社会的・経済的に弱者のマイノリティの中にいて、大人になりきれないところがあります。具体的には、北アフリカ人、ヨーロッパ国内のイスラム教出身者ということで、直面する困難さに関係したものです。

簡単に言えば、多くのフランス人ジハーディストは、個人の政治的なリアクション、もしくは集団的なスティグマのために、シリアへと向かうのです。例えば、格差教育、不平等な雇用機会、警察や法律からの差別、その他のことが理由にあたります。しかしながら、我々はこのことについて話さなくても、この不平等は政治代表性が2つに分かれていないことを表しています。選挙代表制というシステムで、その統計を見れば欠陥があることは明白ですが、表現の自由を制限するという組織的な弊害もあります。特に、主流メディアでその傾向があります。また、メディアが「公式」で、イスラム教徒を「代表」していないことを特筆することで、この偏見は悪化しています。

このような二層の有害な政治的支配は、植民地時代に始まりました。最初に、被支配層を沈黙させました。次に、架空の代表制を手に入れることで、被支配層は国に所属するという感覚を得ました。つまり、植民

地支配を受け入れたのです。今から20年前の1995年に、アルジェリア内戦の時ですが、私がフランスの若いムスリムにインタビューした際、彼は簡潔に、そのような差別的な環境においての共存の困苦さについて話してくれました。「フランスのテレビがアルジェリアやパレスチナ、もしくはイスラムのことについて言っているとき、私達は無理矢理チャンネルを変えさせられます! そして、信じてください、ムッシュー。私達は指がすり切れるほどチャンネルを変えているのです!」移民と子供達に対する仕組まれた嫌悪感と反感は、さらに不快な形で現れることがあります。例えば、つばを吐きかけられたり、頭にベールをまとう妻や姉妹へ、異なる形で攻撃されることがあります。

SH:ISのポジティブな動機について、もう少し教えてもらえますか?

FB:はい。自分たちを否定する世界を破壊することを 必要としている市民の希望には、もっとポジティブな動 機が必要です。経済的にも社会的にも、社会に完全 にとけ込んでいるムスリムでさえも、時には動機が高ま ることもあります。または、ネガティブな動機に取って代 わることもあります。この動機は、シリアでの過激派の 戦闘に係わることから始まり、その後は国際的な戦闘 へと広がりを見せました。歴史的に見ると、ジハーディ ストに係る人たちは、トランスナショナルなイデオロギー や宗派の団結から生じています。最も重要な理由とし て、パレスチナのゲリラ隊の多くは仲間を助けたいん だと言います。彼らからすれば、まあ理解できることで すが、仲間は西洋から見捨てられ、アサド政権のヘリ コプターの銃身から放たれた薬莢によって虐殺された のです。ヨーロッパの歴史から見ると、このように、国を 超えた団結というのは珍しいことではありません。例え ば、1936年のスペイン共和党での団結した支援を考え てみましょう。スペイン共和党は、「国際旅団」という組 織に支えられ、その中には幾人かの有名なフランス人 も含まれていました。もしくは、レジス・ドゥブレというボ リビアのゲリラ運動に参加したフランス人(フランシス・ ミッテラン大統領の前顧問)を考えることもできます。我 々は、数百人ものキリスト教徒が、レバノン内戦の際、 ファランへ党と並んで戦い、その大半がフランス人だっ たということは、ほとんど耳にしません。また、イスラエ ル軍に入ったフランス人のことを考えてもいいでしょう。 たとえ、占領地における、このような行為は国際法上 違法であったにせよ。

さらに、いくつかの博愛主義的な団結を超えて、ISは代表的な理想郷として受け入れられているのだと思います。つまり、イランのホメイニがシーア派の人々に提案した自由な「スンニランド」だという理想郷です。(少なくともISの解釈によると)ムスリムに自分たちの解釈に基づいた宗教的生活が営める場所です。出身国で経験するような障害が全くない場所です。そのうえ、この世界は、必要であるならば、イスラム教嫌いの人たちを、暴力でもって守ることができるのです。さらに注目すべき点は、イスラム嫌いの人たちは、対等に報復することができるのです。軍に対してであれ、象徴的な暴力に対してであれ、爆弾であろうと、風刺画であろうと低しができるということです。

この幅広い文脈に世間は目を向けていません。1月 7日のパリへの攻撃事件の解釈は、「テロリスト」からカ ラシニコフ銃で撃たれた犠牲者にだけ注目されすぎて います。政府やメディアは、イスラエルF-16やフランス のラファール戦闘機、もしくはアメリカのドローンによっ て殺された人々について何も語りません。だから、我 々はこの紛争から「ズームアウト」して、「幅広い」時空 的要素でもって考えねばならないのです。ネガティブ な感情が過激派へと、どのようにして導かれるのかを 知るためには、相互の力関係を、国際的で歴史的な 見方でもって位置づけなくてはなりません。そうするこ とで、植民地時代にまで遡る、彼らの深い政治的な挫 傷を理解できるのです。最近、フランスの一方的な政 策によって、彼らは再燃させられました。イスラエルや アメリカのような第三者と直接、または同盟を通してで す。マリ、イラク、ガザ地区、もしくはイエメンで行われ ています。

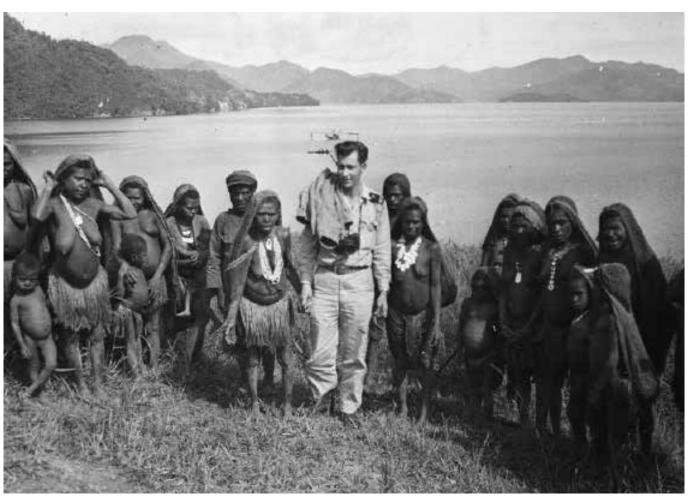
社会学的な変数に焦点をあてた「分析」では取り上げられませんが、初期の闘争や侵略がなければ、今回のパリの事件は起こりえませんでした。最後に、このような言葉で締めくくらせていただこうと思います。9・11テロから15年が絶ちました。このテロ攻撃の経験から、社会学は何を我々に教えてくれたのでしょうか?ほとんど何もない、と私は思います。■

(翻訳: 亀尾 辰砂)

ご意見・感想・質問等は François Burgat < françoisburgat73@gmail.com>とSari Hanafi < sh41@aub.edu.lb>までお寄せください。

>社会学と人類学の 奇妙な歴史

ヤン・ブレマン、アムステルダム大学(オランダ)



オランダ領ニューギニア政府の人類学者 J.V. de Bruyn 博士 写真: 国立人類学博物館(オランダのライデン市)

0世紀初頭、オランダの社会科学における創始者が社会学と人類学との間に線を引いた。 人類学では進歩していない人間を研究する一方、社会学では欧米において生じた、より進歩した共同体による社会組織に焦点をあてた。これは明確な区分けだが、あまりにも単純であることが明らかになった。

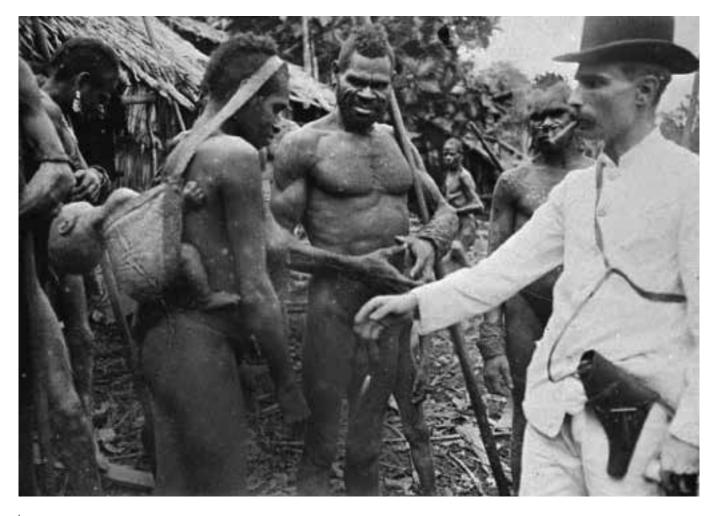
17世紀から、オランダは植民地国を建てた。海外領地を支配するには、社会構造の知識と住民の文化

を理解することが必要とされた。東インド諸島のような 大規模で多数に階層化された、学識のある社会に生 きていたので、この植民地国の人々はアボリジニーと いうよりも、ネイティブと呼ばれた(「アボリジニー」とは、 我々の祖先たちのように、辺鄙な統制のとりにくい居 住地を歩いて回る小規模で国籍を持たない部族一団 の呼称である)。当初の考えとしては、植民地とは主要 都市の利益のためにあった。搾取できる利益という放 流を正当化するために、この行為を言い改めねばなら なかった。植民地主義とは、ある洗練された使節団で あるかのように表現されるようになった。

20世紀初め、外国の支配は植民地の進歩を手助けする後見人の一種として正当化された。有名なmise en valeur (開発) というではテーゼは、人のいない場所にこそ価値があると述べられた。オランダの植民地に関する社会学者による支配は、植民地のアフリカにおけるイギリス政府の人類学者と似ていた。例えば、当局への政策の影響に対して助言する点や、イスラム運動の熱の上昇を抑える方法に対する助言を提

供する点、または植民地政策者が常に気にすることだが、ジャバ農民が資本主義を受け入れるか、などである。文明化された使節団は「ネイティブが今いる場は、かつて私たちがいたのだ。私たちの今のような姿に彼らもなるに違いない」と宣言した。模倣的な変化の誓いを達成するために、植民地化させられた集団は、自らの過去とアイデンティティーから切り離されなくてはならず、歴史のない人として変わらなければならなかった。

解放運動が20世紀半ばの植民地支配を終わらせた時に、白人の責任はなくなったのだろうか?僻地の先住民の習慣と知識を科学的知恵に集約するために、オランダの政治家は大学(特にライデン大学とアムステルダム大学)に「非西欧の社会学」とは何かを教える学科を設置し、教授職を公募することを認可した。この学科では、植民地時代の複雑な社会について研究する。これは奇妙なラベルであった。なぜなら、「非西欧の社会学」とは、これらの社会が推移の道を辿ることで、社会そものもが変化するかもしれないし、変化しな



初めてのニューギニア調査(1906年)。オランダ人の男性はパプアの女性と握手をしようとするが、女性は困惑しているようである。 写真: 国立人類学博物館(オランダのライデン市)

いかもしれないことを意味したからだ。「非西欧の社会学」は独立した学問としてみなされ、パプアニューギニアやスリナムのような場所の部族社会を扱う人類学と、「西洋の」社会学の間に位置付けされた。オランダ特有で、これは実に偏狭的な表現で、ウェーバー、点イース、デュルケームのような思想家の学問にある普遍的な命題を否定するものであった。

この西洋中心の先入観によって、社会学を実践 する者が、第三世界と理解されるものに背を向けさせ ることになった。社会学者はグローバル・ノースの「近 代」社会の研究の仕事だけを特化することができた。 しかし、ポスト植民地主義時代になると、文明化という 使命は苦難に直面した。これは、「先進」国に追いつ けるように「後進」国を援助するという、公的な責任の 中に見られる。多様な人々と文化を1つの括りで表す「 非西洋」という野暮な目標は、もう少し好ましいマニフ エスト言い換えられた。このマニフェストでは、グローバ ル・サウスで開発に失敗した地域で、再度開発を促し たり、開発社会学という分野を創設することにつながっ た。開発社会学とは、世界のその他地域で、ほとんど の人類が住む場所だが、農耕社会から産業都市化の 生活へと変化していく過程をたどるかを検証する学問 である。

その間、人類学の分野もまた変わっていった。「生きた祖先」はもはやいなかった。もし開発途中で、オーストラリア、アジア、アフリカ、アメリカの辺境の地から一掃されていなければ、人類学という分野は国家形成の過程に吸収され、執拗に固持しようとした自治力を失っていただろう。しかし人類学は、社会学とは異なった研究方法で、前進していった。フィールドワークと呼ばれるのだが、人に直接近づいて調査したり、仲間を探したりした。このように、人類学者は近づいた人たちについては精通していた。

しかし社会学との境界線は、どのように線引きされるのだろうか?アムステルダム大学の人類学の教授で、その教授は私が1950年後半にアジア研究を選んだときの研究室にいた人であったが、彼は、人類学は伝統に注目すべき一方で、モダニティは社会学の先

入観であると言った。当初から、社会学と人類学を分ける境界線は役に立たなかった。なぜなら、両者の間には明確な区別がなかったからである。両学問で重要なのは、変化の過程がなぜ起こるのか、どのように起こるのか、そして何の結果をもたらすかを知ることである。両学問では、伝統と近代を対比させて具現化するというよりも、過去と現在についての議論がされている。

私が1987年に母校で、比較社会学の教授に推薦された時、「非西欧」とか「発展」という名の研究はしたくなかった。年配の同僚と私は、Amsterdam School for Social Science Research (通称ASSR)を設置し、博士課程を設けた。ここでは、社会学、人類学、社会史を集約することで、グローバル化の動向を歴史的観点の中で研究を推進する。我々の学術功績は良かったが、これに高額の資金支援をしてくれるように、国家支援機関とアムステルダム大学の執行部を説得することができなかった。重度の支援の不足により、ASSRは廃止され、Amsterdam Institute for Social Science Research として改組された。我々の学部の教授陣は、社会学科と人類学科に分類され、それぞれ別に研究側面を持っている。

この伝統的に2分野1組となっていた社会学と人類 学は、再び別々になってしまったのか?おおむねそう だと言えるだろう。それぞれの焦点は、

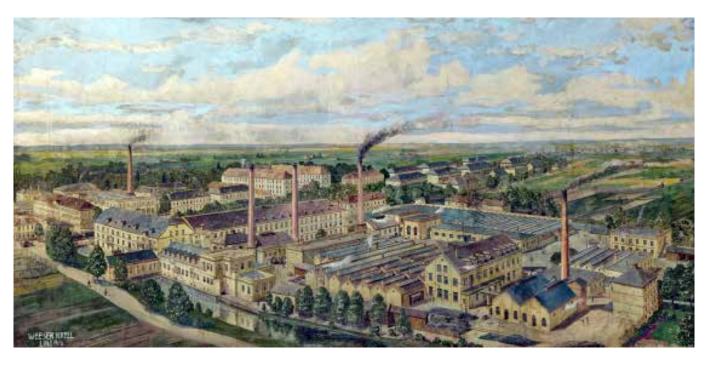
西欧と非西欧である。昔の「もっと進んでいるか」「あまり進んでいないか」の区別の同意語だ。再び分割することは多くの点で複雑である。「先頭を行く走者」と「遅れてくる人」との間の社会的・地理的区別は、現代ではほとんど意味をなさないからである。どうやって後進諸国が先進諸国に追いつくのかを詳細に説明する、神聖化された変化の軌道は消えつつある。西洋社会以外の国々は、西洋社会の後ろを追いかけるわけではない。それに、誰が分かろうか。変化の方向性と速度が逆方向へ向かっているかもしれないことを。■

(翻訳:中野由貴)

ご意見・感想・質問等は Jan Breman < J.C.Breman@uva.nl> までお寄せください。

>オーストリアにおける 公共社会学のレガシー

ルドルフ・リヒター, ウィーン大学 (オーストリア), 第3回ISA社会学フォーラム開催地実行委員会委員長(2016年於:ウィーン)



マリエンサル村の繊維工場(1914)、オーストリアにあるグラーツ大学の歴史社会学の史料

3回ISAフォーラムのテーマは "The Futures We Want: Global Sociology and Struggles for a Better World"である。これは、フォーラムを統括するマルクス・シュルツ会長によって考案された。フォーラムの開催地はこのテーマにふさわしい場所である。オーストリア社会学は、長年に渡り、科学的なインパクトと社会的なコミットメントとを両輪にしようと努力してきた。

1930年代(活発な20年代によって第一次世界大戦の痛みを封じられた後)に、オーストリア社会は大恐慌による打撃を受けた。統計学者のハンス・ザイゼルと共に、マリー・ヤホダとポール・ラザーフェルドは著名な"Marienthal Study"(マリエンサル研究)を実施した。これは、マリエンサル村で工場が閉鎖した後の大量失業者

が、村にもたらした影響について調査したものである。ドイツ語初版の序章では、マリー・ヤホダが研究目的について説明している。1つ目は、マリエンサルでの失業問題を解決すること、2つ目は社会状況に関する客観的な分析を提供することである。序章には、この順番で記されている。この研究姿勢が、オーストリア社会学の根底に流れている。つまり、社会問題を体系的・科学的尽力でもって対処することである。

初版以降の序章には、マリエンサル研究の中で新たな手法を開発するのに努めたということを、ポール・ラザーフェルドは記している。その手法とは、村民の歩く速度を計測すること、タイムシートを配布すること、村の子供たちに将来の夢についてのエッセーを書いてもらうこと、図書館の貸出冊数の統計を使用すること、各世帯に食事

の記録をつけてもらうことである。

フォーラムのテーマに当てはめて考えてみると、マリエンサル研究に携わった研究者は、将来の価値判断を行っていなかった。選択的未来も創ろうとはしなかった。ところが、この研究は「より良い世界を目指す」ことを実現する上でのモデルとなる。それは、解決すべき社会問題を明確に理解できることを提示したからである。失業が個人とコミュニティに及ぼす影響を明らかにすることで、日常生活の破綻と政策決定者が辞任することになった背景が描かれていた。社会問題を詳細に説明することによって、政策決定者の責任を明白なものとしたのである。

ウィーンの科学コミュニティを形作る もう1つの集団はウィーン学団である。 ルドルフ・カルナップや他の論理実 証学の支持者らは、この中には統計



マリエンサル博物館では、マリー・ヤホダ、ハンス・ザイゼル、ポール・ラザースフェルト、ロッテ・シェンク=ダンチンガーを追悼している。オーストリアにあるガーツ大学の歴史社会学の史料

学者のオットー・ノイラートも含まれるのだが、社会学的知識を公然に広めることに一役かった集団である。これは、オーストラリア社会学でよく見られるパターンである。芸術家のゲルト・アルンツと共に、ノイラートは真に迫った統計学をつくり、社会統計学を一般社会に広めるためにGesellschafts-und Wirtschaftsmuseum(社会と経済学の博物館)をウィーンに創設した。この博物館は現在も残っている。

しかし、ウィーン学団の論理実証主 義はオーストリア社会学の一派である にすぎない。これに、カール・ポッパー の批判的合理主義が加わる。ポッパ 一の『開かれた社会とその敵』は著名 な本だが、これは「閉鎖された」共産主 義社会に対する精力的な反論であっ た。この著書にみられる感情の爆発は さておき、ポッパーの政治的議論は明 白であった。つまり「社会は将来に対 して開かれてなければならない。しか し、社会には歴史がある。そして、歴 史を持ち続けるのである」というのが、 彼の論点であった。どれほど人道的 な意図があったとしても、社会から過 度な影響力が及ぶのを閉ざし理想郷 を作ろうとするのは、全体主義への道 を歩み出す。それは「我々の欲する未 来」であるはずがない。

20世紀の2つの世界大戦はオーストリア、中欧、東欧の科学に多大な影

響を及ぼした。第二次世界大戦後、オ ーストリア社会学は一からで直すこと になり、ウィーン大学に社会学部が創 設されたのは1960年代になってからで ある。当初の社会学者のほとんどは、 都市部の住宅問題、若年層の状況、 世代間関係などの社会問題を研究対 象としてきた。オーストリアの社会学者 は、高齢化社会における家族と介護 の状況について調査し、政府向けの 報告書をまとめてきた。1970年代以 降、移民問題を調査する研究者が増 加したので、社会学者は政策立案者 に新たなアプローチ法を助言した。格 差に関する社会構造分析や社会階層 分析も不可欠な研究分野であった。こ のように、社会学の研究は世間からの 注目を浴び続け、新聞で議論されるこ とも多い。

ここ数十年、オーストリア社会学の決定的な特徴としては、科学的な社会学的方法を体系的に用いて、社会問題を研究することである。この手法に、かなりの力を注いできた。将来のオーストリア社会学も、この伝統を受け継ぐことを深く期待する。詳しくは、ISAフォーラムのブログ(http://isaforum2016.univie.ac.at/blog/)を参照していただきたい。

科学的知識と社会的影響とを統合 することを考えるとこで、第3回ISAフォ ーラムのテーマに係る質問につなげよ う。我々は、どのような未来を手に入れ たいのか?そして、我々は、その未来 を、どうしたら手に入れることができる のか?

次の質問を挙げよう。我々はどのように戦うのか?個人的見解だが、社会学者は社会学者として戦うべきである。つまり、一時期のユルゲン・ハーバマスが主張したように、解放的興味を伴いつつ体系的、分析的に戦うのである。

もう1つの質問が思い浮かぶ。我々はどのような未来を手に入れたいのか?現代社会における社会問題(過剰格差、資源アクセスの不平等、など)を列挙することはできるが、この問題を抜きにして、理想の将来を描くことは危険である。理想社会は常に全体主義的であった。特に、社会学者を含めて特定の集団が1つの真実を知っていると主張する場合である。

特定の将来を望むよりは、むしろ、カール・ポッパーが言っていたが、社会学者は変化に寛容な社会と、永続的な歴史のある社会を望むと公言すべきであろう。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Rudolf Richter < rudolf.richter@univie.ac.at > までお寄せください。

>米国とキューバ 中直りは困難

ルイス・E・ルンバウト, Cuban American Alliance (米国ワシントンD.C.), ルベン・G・ルンバウト, カリフォルニア大学アーバイン校(米国)



キューバ革命はどうなったのか?ホセ・マルティ記念碑は ハバナの革命 広場の向かいにあるチェ・ゲバラの肖像 を見渡す。

年12月の13分にわたる演説の中で、バラク・オバマ大統領は、53年間に渡り、キューバ経済の首を絞めつけた計画は失敗だったと述べた。アメリカ合衆国、いや少なくともその行政部は、新たなアプローチを試みるつもりでいた。つまり、キューバと良好な隣国関係と、貿易相手国になるために外交関係を回復するということである。19世紀後半のキューバの国家の英雄で偉大な知識人であるホセ・マルティが述べた内容を言い換えるとすれが、米国とキューバの交渉は静かに実行されなければならなかった。なぜなら、交渉が始まる前にも既得権で和

平交渉を破棄したかもしれないからである。

突然、これらの権利は偏狭的で利己的だと暴露された。アメリカ企業にもたらされる脅威と比較すると、革命を反対する勢力の危険性はない。アメリカ企業は、キューバに進出した世界中の企業を、特に観光業の企業を、監視していた。さらに、農業、家畜、軽産業、工具類、消費財、建造物、住宅、運送業、ハイテク生物医学の共同事業に携わる企業も監視することはできた。

今日、大統領は大企業と中小企業に支えられている。 多くの人々が最近の緩和された規則の下で旅行をして



2015年4月、米州首脳会議でラウル・カストロ 国家評議会議長とバラク・オバマ大統領が握 手をかわす。

いる。今では、多くのキューバ移民や観光客はマイアミとハバナの間を自由に旅行することを当然だと思っている。マイアミの強硬派はフィデルとラウルと同世代である。ニューカマー達が彼らに取って代わっている。強硬派は、キューバ革命初期の頃に、自分たちの財産を剥奪され、貧困を経験しているが、ニューカマーにはその経験がない。今日、新政策は止められない波のようである。しかし、その可能性は計り知れない。同時に正常化への道の複雑化も計り知れない。外交関係を修復することは、単に最初のステップに過ぎないのだ。

>最新のキューバモデル

オバマ大統領の発表の何年も前に、キューバは必要と 思われる新経済方針の討論を始めた。その討論は、未 使用地の開発助成金、中小企業の合法化、国営企業の 新自治権、農業協同組合と非農業協同組合の支援、と いう広範囲な指針の議論に発展した。

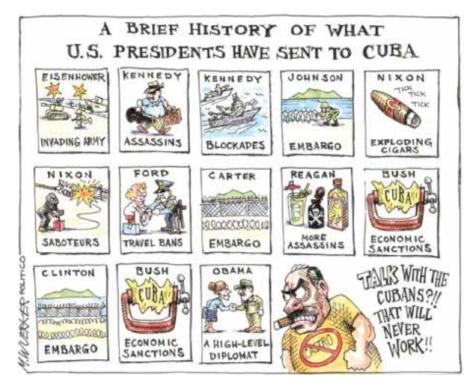
確かに、キューバは多くの食材を生産することで、絶対的な成果を上げなければならない。外国食料品の購入の代わりに、国内産の食糧で補うのである。最も大切な小規模農家や協同組合は、自身の収入が上がるのを実感できるはずだ。新都市産業から需要を産み出すからである。サービス改善と収入上昇により、人々はより良い経済状況を満喫するだろう。しかし、それは推定であり、これまでの結果は一様でない。多くの要因が複雑な状況を生み出す。この中には、基本的な農業生産高の可能性、都市と地方との間の信頼できる輸送体制、生産物の冷蔵技術、十分量の箱と袋、農機と燃料、旧システムの改良などが含まれる。不十分なインフラ整備により、実施できなかったのだ。

キューバの起業家は非効率的である。小事業の経営、 契約、一般的会計のような側面での技術が欠けているの だ。これらは、健全な財政を保つために重要なのだが、 それだけでなく、税収という側面においても重要である。 特に、税収は最近の関心事項だ。国家の縮小や民間部門が拡大されたためである。国営部門(砂糖、観光、鉱山、石油・精錬、保険、バイオ医薬品、教育、電車、航空などの産業を独占)は生産性を改善しなければならない。キューバはまた2つの特異な課題に直面している。一つ目は既存通貨(ペソと兌換ペソ)の統一、2つ目は人口の高齢化である。

1つ目の課題は、長年多くの人々から要求されたことである。政府は徐々に動き出している。つまり、現在、非兌換ペソを主に使用する市民の間では、貨幣価値の強い兌換ペソに、自分たちの手が届かないことを認識し始めている。外国(特に南フロリダから)のドルや商品の流入は、援助してくれる親族が外国にいるか否かの違いで、キューバの世帯に及ぼす影響が異なる。

キューバの人口の高齢化は、別に特有なことではない。 しかし、類い稀な課題を引き起こしている。キューバの医療の発展は、数十年前の人たちよりも、現在の人々の方が長生きしていることを意味する。しかし、将来性のある若者の海外移住が事態を混乱させている。都市化も同様である。若い労働者の減少率は、新しい土地利用計画を特に混乱させる。なぜなら、農業には若者が必要である。農学、土壌管理、マーケティングと関連分野についての教養のある若者も必要だ。2002年から2012年の国勢調査によると、19世紀のキューバ独立戦争以来、初めてキューバの人口が減少した。それは、出生率の低下と他国への移住に起因している。この10年の間に、33万人以上のキューバ人は合法的に米国永住者として受け入れられている。

キューバの新しい経済計画は農業生産性を向上させるための努力を必要とする。同時に、新しい小規模事業、国営企業の経営の改善、マリエルの新しい港、アメリカからの観光客の受け入れ(おそらく大量になるはず)、すべての国々との自由貿易などは、新しい成功への一因ともなるはずだ。



>アメリカの継続する関心

アメリカの政策変化は、親切心ではなく不安の拡大に 起因する。この地域では、多くの変化がみられた。これに は、米州ボリバル同盟貿易条約、南米諸国連合、ラテン アメリカ・カリブ諸国共同体のような組織の成功も含まれ る。この変化の中で、アメリカは必要とされていない。過 去からの急変化である。以前は、アメリカと多国間組織を 設けた場合、アメリカに名誉な地位を与えないことは考え られなかった。同時に、ロシアと特に中国は、ラテンアメリ カとカリブ海に進出している。

伝統的な同盟国は、キューバに対するアメリカ政策を受け入れて欲しいという、アメリカの主張に立腹していた。 昨年の国際連合では、唯一イスラエルだけが経済封鎖に賛成して票を入れた。アメリカはキューバなしではいられない。反対にキューバは世界中の国々から尊敬と感謝の意を集めた。平和は保証されないけれども、キューバはこの戦いに勝利した。

アメリカは恐らく、なんとかしてキューバを新自由主義の 属領島に変える目標を進めるだろう。たとえ、アメリカ企 業が有益な貿易機会を見つけたとしても、それは政党や 大統領とは関係ない。

>2016年と2018年の選挙

未来はどのようであろうか。オバマ大統領は2016年に 任期を終える。共和党が国会の両院のみならず、ホワイト ハウスを手に入れることは起こり得る。共和党はホワイトハ ウスを手に入れるかもしれない。共和党の現在の大統領 立候補者は、実現されてない約束として、キューバの政 治体制の変化を支持している。民主党には、独自の議会 の強硬派がいる。大統領立候補者の有力候補である人物は、その人は自由主義に傾倒し「ソフト・パワー」の実践者なのだが、自分の夫が大統領に就いていた頃のラテンアメリカとカリブ海のようにすると言った。つまり、ベネズエラでウゴ・チャベスが当選した以前の頃である。連邦政府によるキューバの経済封鎖の是認を無効にするのは、下院と上院の多数決投票によってのみ可能である。

2018年、キューバは新しい議長が誕生するだろう。それはおそらく現在の第一副議長のミゲル・ディアス=カネルであろう。彼は新しい社会とともに新しい経済の指導を引き継ぐだろう。彼は、たとえ市場の力が影響を与える空間を持ち、新しい企業家などが、その存在を強化したとしても、キューバが社会主義を継続していくと宣言している。

多くの国々は、超大国と頑固な島の和解を望んでいる。それは可能である。新しい政策、つまりアメリカの政治政策とキューバの経済政策だが、相互の有益な関係の始まりである。しかし55年間の争いはすぐには忘れられない。

今のところ我々は1つのことがわかっている。それは、アメリカとキューバは互いに90マイル離れたままであろうということだ。■

(翻訳: 下川 祐太朗)

ご意見・感想・質問等はRubén G. Rumbaut <rrumbaut@uci.edu か and Luis Rumbaut <lucho10@earthlink.net>までお寄せください。

〉人種主義と 革命について

キューバの活動家 ノルベルト・メサ・カルボネルとのインタビュー

1959年以降、キューバの革命は、人種平等を築くことに努めてきた。奴隷制度が1886年になって廃止された国では、革命によって多くのアフリカ系キューバ人に土地と教育にアクセスできることを、初めて可能にした。これは、新しいユニバーサルな平等主義政策を導入し、人種差別撤廃を明確に主張することで実施された。これに関しては、批判主義の学者でさえも、民主主義に達したとは言えないが、キューバが人種的な不平等を根絶するために、他のどの社会よりも多くのことをしたと述べた。

しかし、キューバの「平和時の非常時」が1990年代初期に始まった時から、資源はひどく制限された。市場志向の改革は、格差拡大という代償を伴った。そして、それは人種の違いを意識したものではなかった。人種関係の緊張は増幅した。この傾向に対処するために、数人の黒人のアーティストと有名な知識人は、力強い反人種差別的な活動家の現場(その一部は、政府出資のRegional Afro-descendant Articulation of Latin America and the Caribbean, Cuban Chapter(スペイン語でARAACと略される)に関係していた。

インタビュアーのルイサ・スチュアー(以下、LS)が60 歳の黒人男性ノルベルト・メサ・カルボネル(以下、NMC)に初めて会ったのは、ARRACのイベントであった。彼は、前屈みに椅子に座り、政治に対する情熱で目を輝かせている。以下は、2014年の後半と2015年の前半に行った長いインタビューの中からの抜粋である。ルイサ・スチュアーはコペンハーゲン大学に所属しており、キューバ研究を専攻している。このインタビューの完全バージョンは、Global Expressにてご覧いただける。

http://isa-global-dialogue.net/?p=4222



ノルベルト・メサ・カルボネル

LS: ノルベルト,簡単に自己紹介をして頂いてもよろしいですか?

NMC: 政治的には、私の立場は複雑だな。革命のときに初めて起きた大きなキャンペーンに、1961年のキューバ識字運動があったんだ。かろうじて10歳になった時、僕は他の人に読み書きを教え始めたんだよ!1963年ハリケーン・フローラが島を通り過ぎたとき、オリエンテでコーヒー豆を詰める団体に所属していた僕は、13歳だったなぁ。大きい軍事動員があった1966年5月には、まだ16歳にもなってなかったね。僕たちは、アメリカの戦艦が来るのをカヌーの陰に隠れて待っていたんだ。つまり、僕は革命を起こす第一人者として教育され、育てられてきたんだ。勉学も一生懸命努力したよ。僕は労働者グループ(党支部の組織者)のリーダーだったんだ。

革命は、僕の人生に多くの意味を与えてくれたよ。でも、1980年にあることが起きて、僕は党を去ることになったのさ。マリエル事件の間、多くの貧しい人々や、多くの黒人が、貧困のためキューバを去ったんだ。僕らは彼らに嫌がらせをして、裏切り者扱いしないといけなかったのさ。会議で、若い仲間が革命に参加することを拒否したので、非難されていたのを見たんだ。僕の友人を追い出したんだよ!会議の後、もし友人が追い出され、僕の友人を人間のくず扱いする奴がいたら、そいつは、まず僕と戦わなくちゃいけないなと思ったんだ。そして、僕は辞職届を提出することに決めたのさ。僕は、自分の良心に従ったんだ。

革命は、黒人を含む沢山の人たちに、多くのいいことを提供してくれたよ。そういうわけで、僕は政府機関に手紙を送って上訴し続けてるのさ。政治的な反体制派とは違って、政府のことを、ぼくはまだ肯定的に考えているんだ。そして、僕はフィデルの定義に従って、革命運動を続けてるんだ。ほとんどの黒人は、革命運動を支援しているよ。理にかなっているよ。革命が黒人達に、いろんな恩恵を与えているのを考えてみると。だからと言って、僕ら黒人が、永遠に革命に対して感謝しなくてはならないという訳ではないんだ。

そうして、人種的な格差が大きくなっていった1990年代に、僕らは人種差別と戦うために、Cofradía de la Negritudという団体を作ったんだ。Cofradíaについて怖いことは、僕らが政治的な反体制派というレッテルをはられなくなることなんだ。たとえ批判的な立場でも、僕らは社会主義の対話の範囲内で活動するのさ。僕らは、ただ人種差別のある社会主義が欲しいという訳じゃないんだよ!僕らは、共産党にキューバで人種主義の問題に対して取り組むように求めているんだ。共産党がきちんと問題に取り組まない限り、他の全ての機関は行動するのを、ためらうだろうからね。

LS:現在キューバの人種主義に関係した、主な問題は何ですか?そして、あなたはその問題のうち経験したものはありますか?

NMC: 黒人の組織は、しばしば「人種差別主義者」であると 責められて、抑制されたよ。 黒人が自分自身を前向きに 捉える機会なんて、ほぼなかったね。 君も知っていると思う けど、僕らは白人と結婚するか、肌の黒さをなくすなどをし て、adelantar(前進する)ことをしていたんだ。 この肌の白さ への憧れは、人々が自分の人種上の身分を認識できる範 囲を制限するんだよ。 そのせいで、キューバ経済では、 黒人 がいい給料を貰えにくいというような、 すごく深刻な人種問 題に立ち向かいづらくなるのさ。

実際に人種差別を経験したこともあるよ。長い間、僕はマリーナ・ヘミングウェイという所で働いていたんだ。僕の隣人が、そこの店の上司になった1997年から、働き始めたんだよ。そこで、僕は自分のできる仕事があるか尋ねたんだよね。 結局、僕らは同じ村の出身で、以前一緒に働いたこともあったんだよ。そこで働くまでは、国際ホテルで接待の仕事をしていて、英語を話していたんだ。そしたら彼は言ったのさ。「ノルベルト、これから君を助けてあげるよ。でも、よく聞いて。君は受付で働くことや、店で働けると思う?それは無理さ。マリーナ・ヘミングウェイでは、黒人が市民と接する

仕事はないんだ。だから、君を倉庫で働かせることにしたんだ。」かつての党首だった人がだよ!僕は仕事が必要だったんで、こう言ったんだ。「ああ、分かりました。倉庫ですね。 大丈夫ですよ…。」

しばらくして、僕は彼らがボーイを探しているという話を聞きつけて、そして、なんとか今の地位につけたんだ。僕ら5人のうち2人は、上役からの支援を受けていて安心しきっていた。その一方僕と他の2人、はみんな黒人で、英語を勉強していたんだよ。でも、沢山のボーイを必要としないホテルが、初めに再訓練を施したのは誰だと思うかい?もちろん、実際に英語を話せる僕たち3人の黒人さ!僕らは、警備員養成所へと行くことになったんだ。未だに、その場所に入った時のことを覚えているよ。ほとんどの黒人は、観光旅行部署で働いていなかったけど、スタッフが多すぎるという理由で、再訓練に送られたのは、僕らと同じ境遇の人が6割。黒人だったんだ!

でも、事態がさらに悪化したのさ。僕らは解雇されたんだ よ。不法行為だ。組合に不平を言っても、事態は何も変わら なかった。そこで僕は、刑法で認められた、平等権の侵害と して告訴することにしたんだ。最初、弁護士事務局へ行った んだ。それから地方の検察庁に行かせられて、結局そこか ら警察署に行かせられたんだ。当局の人に、平等権に関し て申し立てをしたいと伝えたことを憶えてるよ。彼女は、本当 に不可解な目で僕を見たんだ。「平等権の侵害ですって?? 」「はいcompañera(同等の立場とみなす女性への呼びか け)。ホテル支配人を人種差別で訴えたいんです!」彼女は あきれて物も言えない感じだった。上司が僕の不満を汲み 取ってくれて、早速調査を始めてくれたんだ!ホテルは、大 慌てだったね。警察の調査員は事態を深刻に受け止めてく れて、ホテルのマネージャーは別のホテルに異動することに なったよ。でも結局、このことが刑事罪にはならなかったと書 かれた手紙が、検察官から届いたんだ。彼らを訴えることは できなかった。僕の訴えは却下されたのさ。

クバトール・ホテルでは、旅行案内人を雇いたがっていた。本当に急いだよ。ホテルで働いた経験もあるし、英語も話せるし、僕は完全に適任だ!ホテルに出向いたところ、マネージャーが今いなくて、明日戻ってくることを伝えられたんだ。3日目に、僕がマネージャーの帰りを待っていたところ、2人の白人が中へ入って行ったんだ。彼らは僕が希望している仕事について話していた!突然マネージャーが中に入ってきたようだったんだ!僕は2人の中に加わりたかったさ。だけど、希望職が埋まってしまったことを、伝えられたんだ。

こういった問題は、キューバの全ての良い職にはつきものなんだよ。ぼくは、人生の大半をキューバで最高技術のある搾乳場の企業で、ホルスタイン牛を育てる遺伝学者として働いたんだ。始めたばかりの時に、職位の高い会議での出席者が、ほぼ全員白人だってことに気づいたんだけど、あの時はあまり気にしなかったね。今ではもっと気にするけど。僕は、その仕事に就くのが最適な黒人たちが、白人と入れ替えられるのを、多すぎるっていうぐらい見てきてるんだ。キューバの一流の生物薬学企業の職場でのことなんだけど、僕の最後の仕事なんだけど、その企業の人達は、僕を含めた黒人の専門家を全員辞めさせようとしていたんだ。僕は運



今日のキューバの人種主義についての曖昧なコメント "Agua blanca, agua negra"(白い水、黒い水)が中央ハバナの Callejón de Hamel の上のタンクに書かれてある。アフロ=キューバ文化を理解する一環としての芸術コミュニティの取り組み。写真: ルイサ・スチュアー

動に係っていたので、なおさらだよ。多くの黒人の同僚達は ハラスメントのために辞めたんだ。 最終的には、僕は早期辞 職を選んだよ。

昨年、僕等は Worker's Central Union of Cuba(CTC)に、この人種差別問題を公に非難してくれないかという質問状を送ったんだけど、彼らが何か1つでもしてくれたと思うかい?何もだよ。僕らには、リーダーシップがあって、こういった問題が存在することを認識してくれる政党が必要なんだ。これがない限り、他の市民社会組織団体は、このことについて話すことはないだろうね。「繁栄的、かつ持続可能な社会主義を築く」っていうのが、風潮としてあるんだ。「繁栄と持続可能」ってすごくいいよね。でも人種問題はどうなるのって話だよ。新しい経済改革、海外からの投資とか、小さいcuentapropismo(起業家)を増やすとか、こういったこと全部が、この国の人種問題を悪化させているんだよ。

LS:このキューバでの人種問題は、より熟練した、より優れた黒人労働者達にだけ影響するものなのでしょうか?

NMC:キューバの主な人種問題は貧困にあるんだ。多くの黒人の若者たちは大学に行けない。勉強せずに、ちょっとした仕事で質素に家族を養うんだよ。どうやったら千人近くのパキスタンの若者たちを医者にならせるために教育費を払って、5千人のキューバの勉学の金を必要としている貧しい若者達に払えないことがあるんだい。この革命は「謙虚な人による、謙虚な人のための」だと思われていたから。今では、裕福な家族だけが、子供に勉強させることができのかい?

キューバには何千エーカーもの雑草だらけの土地がある だろ?皆、そんな場所では働きたくないからね。また、都市 に移住するにも、ちゃんとした住居がない人がいるっていう のがわかっているんだ。僕の提案は、田舎に住みたがって いる黒人の家族を見つけて、農業コミュニティを作ることだ よ。もちろん色々な支援がいるよ。資本だったり、トラクターだ ったり。こういった財政的な支援は、非政府組織に頼めばい いんだ。もちろんキューバ政府は土地の所有権を、黒人に 譲渡しないといけないよ。このところ、色々な場所で土地が 売られてるからね。19世紀の頃、この場所、特にオリエント州 では、農場は自由黒人のものだったんだ。多くの自由黒人 は、スペインとの独立戦争で戦って、解放軍に加わるために 農場を去っていった。でも、自由黒人の権利証書が適切に 登録されてなかったのが原因で、アメリカ企業が彼らの土地 を買い占めたんだ。その黒人には何が起きたかって?土地 を買い占められた黒人達は、もちろん抗議する覚悟はできて いたね。土地を取り戻すために、彼らの多くは Partido Independiente de Colorに率いられて、東の州での1912年の反乱 に混ざっていったんだ。でも、彼らの多くは、その後の抑圧 によって殺されてしまったんだ。

今日の再定住プログラムは、歴史的な正義の問題なんだ。政府が彼らに土地を与えるというのが、良い意思表示となるのかということだよ。欲しい人に施すべきだよ。これは、黒人家族への歴史的な公平はプログラムだけど、白人でも加わりたい人がいれば断る理由なんて無いよ。けど黒人にとっては、彼らの経済条件を改善する数少ない手段のうちの1つなんだ。

LS: 今までどのように自分自身でやりくりされてきたのですか?Cofradía活動を組織するための資金をどのように調達されるのですか?

NMC:ペソ貨幣で、ほんの数ドルの年金で生活をしていてるよ。生活は楽じゃないよ。夜に裕福な人のガードマンを、月給30ドルでやっているんだけど、こんなに少しの金で活動を組織化するのは大変だよ。遠方からはるばる来た人は、何か食べさせてくれのを期待するから。時には、財産やluchando(戦闘)を収入の範囲内でやりくりするので、精一杯っていう理由だけで、集会を延期しなくちゃいけないんだ。でも少なくとも、僕らが思惑なんかじゃなくて、誠意から活動をやっていることを、みんなわかってくれるし、僕たちは、もちろん続けていくよ。僕が直面した問題、もしくはもっと酷い、つまり僕らが革命を起こす前の状態に自分の孫が直面するなんて想像できないしね。■

(翻訳: 吉岡 佐希恵、横田 昌希)

ご意見・感想・質問等は Luisa Steur < luisasteur@yahoo.co.uk > とNorberto Mesa Carbonell < nmesacarbonell@gmail.com > までお寄せください。

〉ハバナからの 大きな知らせ¹

ルイサ・スチュアー, コペンハーゲン大学 (デンマーク)



中央ハバナの清掃車 写真: ルイサ・スチュアー

1014年12月17日、オバマ氏は、米国とキューバの関係を完全に回復することを発表した日は、ハバナの記念すべき日だ。元ボクサーのフアンは、街路清掃人で muy fidelista (とてもカストロに忠実な人)である。彼はゴミの中で以前みつけた半分壊れたテレビをセントロ・ハバナ近郊の衛生サービスの会社の中に設置した。米国とキューバの関係の回復のニュースは、このテレビを観ていて知った。フアンは、ラウル・カストロの演説の一部から、5人のキューバの英雄の全員はついに解放されたということを知ることで、彼は感情が高まっていた。やっと、多くの年月をかけて、キューバ中の行進と壁面で要求してことが認められた。しかし夜になると、日常の lucha (闘争)に戻った彼を見つ

けた時、つまり彼が現金に還元できる缶をゴミの中から探している時だが、同僚の間でありふれた議論は起こった。つまり、英雄たちがキューバに戻ったとき、彼らが刑務所で過ごした年月を金銭で補償されるというのが、事実かということだ。そして車や家を受け取るのか?フアンは、yanki (アメリカの)刑務所で英雄らが受けたことに勝る補償はないと、建前上の意見を言った。しかし、同僚らは無言で怒りを表した。

フアンの隣人、マリは、彼女の雇用主の薄型テレビで、マイアミの違法放送のチャンネルのニュースを観ていた。放送は、アメリカのパイロットの困惑した娘を放映していた。このパイロットはキューバ軍に撃ち落とされ

た。この襲撃は、5人の英雄の中の1人が、キューバ政府 に、アメリカによる「人道的介入」(パイロットの娘の見解) があったとの情報が入った後に実施された。「人道的介 入」は、キューバ側からすれば「テロ襲撃」であった。マリ の雇用主は、観光客向けの家を所有している。マリは、 この家を掃除している。雇用主は仕事に戻ることを、マ リに催促した。「この chica (女の子)は」と雇用主がつぶ やいた。「彼女はメキシコで働くことばかりを夢見ている わ。資本主義社会で実際に働くことが、何を意味するの かを理解していないわ。」雇用主が去ったので、マリは反 抗的に言った。「この魔女が! 私がいないと、どうなる かを見てみましょう。観光客がこの家を訪れる唯一の理 由は、私がいるからよ!」マリは楽観的に答えた。このニ ュースを知ったからには、メキシコに行く必要はない。き っとキューバの経済は復興し、より多くの観光客が来て、 生活はより良くなるだろう。

しかし、フアンとマリのような人々の人生も明るくなるだろうか?多くのキューバ人のように、彼らは、その変革が前向きであると想定する。経済の開放はドルの流入の開始を意味する。生活水準は1989年の水準に戻るだろう。配給カードで十分な食料を確保でき、キューバ市民は寛大な医療保険や教育機会を受けられた時のように。2014年12月17日が、キューバのポスト社会主義社会の幕開けと考える人は、ほとんどいないだろう。つまり、民営化、市場化、国家の変容、格差などの幕開けである。

フアンを例にとってみよう。公務員として雇われた路 上清掃人であるが、彼は約800ペソ(約32ドル)稼いで いる。同じ業種の上司よりも多い額である。フアンのボス の多くは、観光客に貸し出すための不動産を獲得する に忙しい。兌換ペンで30ドルが平均額である。上司らに は、国際的なネットワークがある。この組織的な特権を、 市場で儲けを出せる絆にしてしまう。フアンが金銭を稼 げる望みとしては、おんぼろゴミカートと、イベント終了後 に清掃を依頼する隣人である。隣人が支払ってくれるこ とで、賃金が貰えるのが前提だが。配給カードは、基本 的な物品の配給のみが保証される。この中に、野菜、肉 はあるが、彼の慢性潰瘍を直すのに必要な牛乳は含ま れない。フアンはハバナに10年住んでいるが、定住先が ない。彼には登録アドレスもない。医師の処方箋がない ので、闇市場でオメプラゾールを購入しなければならな い。国営地方自治体の社会福祉サービスが「民営化」さ れる噂から、フアンの不安感はさらに高まっている。賃金 が上昇する可能性はあるが、フアンのような労働者の使 い捨てが始まるかもしれない。

マリには、少なくとも定住先がある。あらゆる社会福祉 サービスを、彼女の家族の都合の良いようにするだけの 十分な現金もある。しかし cuentapropista (自営業者)として、キューバでの括りになるが、彼女の月給は40ドルだけである。福利厚生や年金はない。彼女の雇用主が、彼女を登録することを拒否しているため、検査官から賄賂を要求されている。マリの雇用者は、この費用を彼女に支払わせている。マリの給与はゼロなので、彼女は観光客のチップに頼らざるを得ない。マリと彼女の雇用者は、何が観光客を家に惹き付けるかで議論になるが、明らかに、この交渉は構造的に不平等である。チップでさえ、彼女の雇用主は一晩に50ドルまで稼いでいるのに対し、マリは週に約25ドル稼ぐのがやっとである。マリは貧困の危機に瀕している。金や貯蓄を確保できないまま、歳をとっていくのである。

残念ながら、これらの物語は、東ヨーロッパの社会主義体制が終焉した後に経験したことに共鳴する。新しい「協同組合」は、多くの労働者から土地、家屋、職などを取り上げた。一方で、社会主義体制の時代に国家管理者として働いていた人たちは、彼らの組織的特権を(準)財産権へと転換した。積極的に民営化を支持したのである。キューバでは、都市部クラックス(観光事業や本当の土地代から利益を得る財産所有者)の階級の人数が増加した。彼らは、さらに規制緩和、財産所有権の確保、減税を強いるかもしれない。このような動きは、普通の労働者の犠牲のもとに行われる。社会主義的なセイフティネットを、さらに打ち壊すかもしれない。

もちろん、キューバは東欧ではない。キューバの社会主義は、現実の、長く待ち受けた、忍耐強く準備され、広く支持された革命により成立した。ソ連の侵略の賜物ではない。社会主義と革命は、キューバで独自に確立されたものである。労働者の誇り、ならびにセントロ・ハバナに痕跡がみられる、活発な民衆中心主義で、社会主義でもあるsavoir vivre (生きる術)を見ることができる。変化する国際関係の中では、キューバはおそらく、ポスト社会主義ではなく、新しい社会主義の道を辿るかもしれない。それが起こるためには、ポスト社会主義の軌道が係わることのリスクを認識し、公の場で意見交換する必要があるかもしれない。■

(翻訳: 宮原 佳歩)

ご意見・感想・質問等は Luisa Steur <<u>luisasteur@yahoo.co.uk</u>> までお寄せください。

1 2014年9月から2015年1月までJuan Marinello Center for Cultural Researchに所属し、ハバナでフィールドワークを行った。 "International seminar of socio-cultural anthropology"(2015年1月9日から12日)というセッションを、私は取り仕切ったのだが、このセッションの参加者とIUAES(国際人類学民族科学連合) Commission on Global Transformations and Marxian Anthropology からの招待者からいただいたコメントを、本稿に取り入れてある。この場を借りて感謝申し上げる。本稿で描かれた労働者の名前は匿名であり、その一部はフィクションである。

>太陽花学生運動と

四面楚歌の台湾社会学

何 明修, 国立台湾大学(台湾)



台湾の太陽花学生運動は、社会学の公的役割に変化をもたらした

1014年3月18日、台湾の大学生は中国との安定的自由貿易化に異を唱えるために、立法院の前に集結した。誰も予想しなかったが、国会議事堂を24時間占拠することになり、政治的危機をもたらすことになった。いわゆる太陽花学生運動は、6ヶ月後の香港の傘の革命を誘発したと考えられている。議論の余地はあるかもしれないが、太陽花学生運動は、台湾では、一番長く大規模な集団闘争とみられている。2008年に保守的な中国国民党が国政を握ると、台湾では社会運動が活発化した。最終的には、太陽花学生運動は平和的に幕を閉じたが、立法内部での自由貿易協定の論争を停止させるほどの影響力があった。

台湾では、公務執行妨害をするという習慣はなく、 保守的政治文化のもとでは過激的抗議運動の土壌は 育たなかった。太陽花学生運動は大衆の支持を多い に得ていたが、少なくともこれには、3つの重複する理 由が考えられる。1つ目は、民主的プロセスを守り、国際交渉の透明化と監視の強化を求めたことである。2つ目は自由貿易を抗議した点である。3つ目は中国に反対するナショナリスト運動としての要素である。この並外れた反体制抗議には、ポラーニの社会保護という要素さえもみられる。なぜなら、中華人民共和国が台湾へ領土を拡張しようという野望は「中国・台湾間の経済交流の奨励」という言葉で表現されているからである。この交流とは、賃金労働者と民主主義を犠牲にし、大企業に賛意を示すことだと、一般的には考えられている。

台湾の社会学コミュニティ(教員と学生を含む)は、この前例のない抗議に深く係っていた。太陽花学生運動の指導者が全国レベルでボイコットに挑もうという呼びかけに答える形で、清華大学、台北大学、中山大学の社会学部は大学を休講にし、大学執行部と教育省に反抗した。社会学者の多くは、包囲された議会と

キャンパスでティーチインを実行した。抗議運動参加者の間では、対議民主主義の試みとして、多くの学生と教員が自由貿易、若者の失業、などを含むさまざまなトピックについて議論した。その他の大学の社会学部の学生は包囲された議会の前に泊まり込んだ。この中には、陳為廷(清華大学からの太陽花学生運動のカリスマ的指導者)、匿名ボランティア、参加者もいた。台湾社会学会では、全会一致の採決をオンライン上で得た後に、3月25日に太陽花学生運動を支持するとの声明文を発表した。11月には、学生運動を認めるという意味を込めて、台湾社会学会は年次大会に、主要な学生指導者である魏揚に基調講演者として招待した。

確かに、台湾の社会学者の中には、学者が学生 運動に係ることに心良く思わないものも、少なからずいた。台湾社会学会のニューズレターの中に「中立的価値観」を根拠に政治参加に反対する意見が掲載されると、現代でウェーバー的概念を語る必要があると、学生運動参加を支持する人たちからの反撃があった。重要なことは、社会学の使命と公的役割の論争によって、社会学が健全で活発な学問であることが証明されたことである。

台湾の社会学コミュニティは注目を浴びる活動を 行っていたが、当然、保守派の攻撃をも反撃するほど だった。中国国民党の議員は、後になってから、「学 生に路上を占拠するように煽り立てる以外は何もして いなではないか」と、公の場で、社会学者に怒りを露 にした。そして、台湾教育部部長(教育大臣)に国立 大学の社会学部を調査するように依頼した。この中傷 とみらる行為は、早急に対応された。学生と教員の多 くは、社会学の批判精神を守るために、論説を執筆し た。これは、社会学という学問の重要性を公の場で主 張する貴重な機会であった。社会学部にかかってきた 抗議の電話は不愉快なものであった。電話をかけてき た人たちの多くは名乗らず、学部の事務スタッフに対して暴言を吐くだけであったからである。中山大学の社会学部には、保護者から、休講措置に対する抗議の電話がかかってきた。この保護者は本名を明かしたのだが、大学の休講措置によって、3ヶ月後に卒業できるはずだった娘の将来に傷がついたと主張した。(実は、社会学部は最近開設されたので、抗議運動の時期に4年生は存在していなかった。)

結局、太陽花学生運動は台湾社会学に有益な影響を及ぼした。我々が実施したティーチイン、討議民主主義、論説の執筆を通じて、我々の学術分野の知名度があがった。社会学に興味を抱く学生も増えた。なぜなら、社会学の概念を用いることで、現代社会で権力が、どのように維持・行使され、挑まれるかについて考えるのに適しているからである。2015年、国立台湾大学院社会学研究科の受験者数は2倍になった。多くの受験者は、太陽花学生運動での経験が大学院で社会学を学ぶことを決意せたと述べていた。

太陽花学生運動による長期的な影響を知る由もないが、過去の経験から大体のことはわかる。学生主導型の民主化運動である1990年の三月学生運動は、台湾の社会学の中に新たな血を送り込むことにつながった。この頃に、学生運動に参加していた学生は、現在は40代や50代前半の社会学者である。彼らによる教育と研究は、台湾社会学に特色を持たせた。つまり、社会問題を積極的に取り上げ、実際に参加するように導きつつも、苦境に立たたされるということである。同様に、時がたてば、太陽花学生運動も台湾社会学の在り方を新しい形に作り変えるだろう。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Ming-sho Ho <mingshoho@gmail.com> までお寄せください。

>どちらが先?

労働運動?それとも環境運動?

劉 華真, 国立台湾大学(台湾), RC 44 労働運動 財務担当



福島災害の後に起こった台湾の反核運動 (2011年4月30日) 写真: 劉 華真

970年11月13日、韓国人 織物作業者のChun Tae-II率いる天満デモ隊は、過 酷な労働環境に対する抗 議と「1日9時間労働、月4日間の 休日」を要求した。直接対決にて 終止符が打たれ、チャンは自ら火 をつけ、「私たちは機械ではない、 労働法典の遵守を要求する」と叫 んだ。チャンらは自らが奮闘し犠 牲となることで、新進の民主主義 連合運動を鼓舞し、軍事政権支配者の陰謀が膨らむなかで労働と 資本の深い対立を表面化させた。

4か月前、台湾で95人の台湾 人農業者が金融補償と2年連続で 田畑に損害を受け、作物に被害が 出ているため、地域の灌漑用水路 系に直接、液体毒を排出する近く の食品加工工場の移転を求めた。 この出来事は64の類似訴状があ ったことと、ピケッティング、挑発的 行動が起こったことに加えて、注 目すべき点は、同年に開発志向 国家による上限のない産業発展 促進を抑制することを目的とした 台湾における公害防止運動が最 初のピークを迎えたことである。

チャンらの抗議と台湾人農業者の要求は無関係ではなかった。 そのため、謎が次々とでてきた。韓



韓国政府に対する労働抗議として自殺した二 人の労働者の葬式 (2003年11月13日) 写真: 劉 華真

国も台湾も同様に植民地、独裁政権、そして急速な産業化が似たような過酷な労働環境と環境破壊をもたらした。しかし、この運動は様々な方面で続いていた。韓国の労働運動と台湾の環境運動は似たような形式を取り始めたが、大環境悪化が起こり、台湾で労働環境が悪化するのは10年後のことであった。台湾と韓国は似たような構造をしているが、なぜ労働運動と環境運動の順番が逆だったのか?

開発志向国家と企業経済とい う状況のなかで、現実と制限、2種 類の運動の権力には秘密が存在 し、2つの運動とも世界に影響を与 えるという特徴があった。必要不可 欠な役割を担う製造業や配送業 の労働者によって、労働組合運動 の影響力が増していった。労働者 は利益至上主義の資本家に労働 力を提供しないことにより、拒否を した。これと対照的に環境運動は 大きな影響力はなかった。しかし、 普遍的で集団的価値を求めて働 くことを主張することで、新たなイ デオロギーを持った大衆を言説の 力によって説得する力を持ってい

1980年代の韓国と台湾はとも に独裁主義であったにもかかわら ず、異なる戦略の社会運動を行っ た。韓国は重大な抑圧、台湾は巧 みな編入を行った。このような異な った戦略は、韓国の環境運動と台湾の労働運動を組み込むことで成功した。しかし、韓国の労働運動は抑圧に対抗する術を見つけ、台湾の農業者らは選出されることに対抗することができた。

韓国の労働運動は抑圧を受 け、不満が議題に上げられなかっ た。そのとき、労働組合員は組織 化したインフラ社会基盤を強化し、 労働者同士で団結できるように法 の抜け穴を探した。抑圧は影響力 を求める労働者らを止めることは できなかった。表面上完璧な台湾 政府は、環境汚染関連の問題を 解決するのに失敗した。そのとき、 環境汚染被害者や環境問題支持 者は、政府高官レベルに請願す ることを学んだ。挑発的な行動をと り、メディアを含む話を聞いてくれ る人たちと議論を巻き起こしたの だ。結果的に環境に関する考えは 世間に広まり、徐々に大きくなって いるイデオロギーの力の宣伝をし た形になった。皮肉を言えば、成 功した運動を阻む政治状況であっ たにもかかわらず、特に最初は状 況が良いからだが、社会的文脈に よって、珍しいタイプの戦略が好ま れた。このようにして、韓国の労働 運動は影響力を強めた。一方で、 台湾の環境運動はイデオロギーの 力を高め、異なる運動へと変わっ

先におこった2つの運動は対抗 勢力として立ち上げられると、それ は勢力を強めるために、その国独 自の方向性へ動き始めた。韓国の 労働運動は交戦状態と自己組織 を残した一方で、台湾の環境運動 家は実用主義、政治的交渉、和 解を含む戦略に依存し続けた。後 に起こる運動、つまり韓国では環境運動に環境運動が続き、台湾 では環境運動に労働運動が続く のだが、先に起こった「運動のテン プレート」をそれぞれの組織的、文 化的戦略に合わせ真似し、応用し た。

この2つの全く異なる運動を比較すると、勢力の成り立ちが全く異なることがわかる。韓国、台湾ともに労働運動は組織化した機械業や石油化学業、郵便サービス業、造船業などの戦略的産業によって影響力を増していった。また、韓国、台湾の環境運動は芸術のPR活動やニュースの見出しを包括することでイデオロギーの力を最大限に引き出した。

しかし、力の最大化には代償があった。組織化した労働者は大衆の支援を犠牲にした「労働貴族」の代表とされ、名誉を傷つけられた。工場移転、終身雇用の保証がなくなったことや、組織化されていない移民労働者、非正社員の増加により、その支援は徐々に失



韓国の全国労働闘争(2003年11月13日) 写真: 劉 華真

われていった。

一方で、韓国、台湾ともに環境保護はパブリック・ディスコースの一環となり、新たな影響力のある勢力がでてきた。政府の環境保護機関、私的環境コンサルタント・シンクタンク、民間会社は運動における環境ディスコースを独占しようと、次々に参加した。さらに、台湾の環境運動、韓国の環境運動ともに、貧困や不利な立場の経済的生き残りを考慮した生態学的視点を持つことに失敗したことが挙げられる。相手の勢力に敗れ続けた。

重大な局面のなか、労働運動、環境運動ともに第2の力を手に入れた。本来有利である立場での制限を相殺するものとしてである。つまり、労働運動は公共利益に関する懸念を追及した。その一方で環境運動は、さらに影響力を

大きくして優位に立つ組合に対抗しようとした。

また、重大局面のなか、労働運 動と環境運動が同盟する可能性 がでてきた。互いに、それぞれの 困難に共感し、蓄積してきたスキ ルを理解し始めた。労働者はどち らの場合でも、草の根レベルでは 強く組織化できることがわかった。 しかし、弱点はディコースを作れな いことである。一方、環境運動は、 ディコースを作るのは強いが、草 の根レベルの結束力を高められな い傾向にあった。それぞれの運動 は、特有のスキルと適性を持って いた。また、それらの中には労働 運動にはあっても環境運動にはな いものがあり、その逆もみられた。 そして、全て必要なものであった。

この2つの運動の交差の裏には、労働運動と環境運動の相補性があった。運動の起こし方や順

序、道筋の立て方の議論を再構築させるために「運動の力」をコンセプトの説明として用いることで、今回の韓国と台湾の運動が労働運動と環境運動の連携の基礎をなすことを明らかにした。今日、この2つの運動は過去や未来の労働運動や環境運動に関する学報者や活動家を同様に再評価することを促し、2つの勢力は現代や私たちの想像する未来を形づくっていると言えよう。■

(翻訳: 関口 楓馬)

ご意見・感想。 質問等は Hwa-Jen Liu <<u>hjliu@ntu.edu.tw</u>> までお寄せください。

¹ 議論の詳細は Leverage of the Weak: Labor and Environmental Movements in Taiwan and South Korea, 2015, University of Minnesota Pressを参照。

>台湾の圧縮された パレントフッド

藍 佩嘉, 国立台湾大学(台湾), RC06 家族とRC44 労働運動 会員



台湾の両親向けのアドバイス本には、中間層の核家族を理想型としたものが多い。上記は新北市政府が発行した『幸福家族 123』の表紙

湾の出生率は世界でみても低水準である。史上例をみないほど、大切にされ、傷っきやすい子供を育てなければならないので、台湾で育児をする親は子供の感情やニーズについて、専門家の意見を常に耳にしている。専門家の意見には、西洋社会からの翻訳がしばしば見られる。なぜ今日の親は、文化的資源や市場サービスへのアクセスが拡充されているにもかかわらず、さらなるプレッシャー、不安、疑念に駆られるのか?本研究では、この謎を学校での観察、ディスコース分析、両親とのイン・デプス・インタビュー調査を用いて明らかにしていく。インタビュー調査の対象者は、さまざまな社会的・経済的背景のある50世帯以上の父親・母親である。

育児と階級格差の結びつきは、長年に渡り、社会学の 重要な研究課題である。先攻研究を整理してみると、アンドレア・ヴィマーとニナ・グリック・シラーが言うところの「方法 論的国家主義」に苛まれている。ある社会における階級の 特徴を、閉ざされた分析単位を基軸として考察するのが、 先攻研究の傾向である。その結果、個人同士の交流関係 や互いへの影響力によって社会が構築されていることを看 過する傾向があった。

台湾の事例はグローバル社会学の戦略的研究となる。 グローバル社会学とは、地理的空間が知識を形成する上で重要であるとし、ヨーロッパ社会学の理論や概念を地域 化することである。本稿では育児を取り上げることで、グローバル化が、どのようにして家族生活というミクロ領域と階級格差を形作るかを実証的に分析する。戦後の台湾では、育児に関するパブリック・ディスコースはドラスティックに変化した。つまり、子供の地位が、軍事国家を支える労働力の身体として考えられていた時代から、生物政治学的な健全な人体の支配へと変化したのである。同様に、両親の役割も変化した。子供の教育を厳しく行う側というよりは、育児の指南を受ける側として扱われるようになった。

産業化、都市化、出生率の低下によって、近代の子供・両親の在り方に関する考えが生じたと信じられている。 この考え方の根底には近代化の影響がみられる。すなわち、西洋モダニティによる経験を普遍的モデルとして捉え、 世界各地でみられる権力格差や文化的差異を考え方で視野に入れない。

もう一つには、親や子供であることが世界規模で画一化されていることを、グローバル資本主義勢力のもとでみられるマクドナル化の一種だという解釈が挙げられる。つまり、子供の発達と幼少教育の科学的知識が、世界中を駆け巡るようになったということである。双方の見解は、グローバリゼーションを外生変数として軽く考えているので、地域社会がグローバル化の要素を、その地域に即した適切な形に直して、混成化することを看過する危険性を帯びている。

韓国の学者である張慶變は「圧縮されたモダニティ」という概念を用いることで、時間と空間とを圧縮する、急速な経済的、政治的、社会的、文化的変化がみられる文明的な条件について述べた。複合的な文明化のさまざまな構成要素(伝統的、近代的、ポスト近代的、現地的、外国・グローバルな要素)は、さまざまな社会の中で共存、競合、感化し合うのである。圧縮されたモダニティという文脈でみられる、親になるという慣行が複雑に変化し、時々反駁することを表すために、私は"compressed parenthood"(圧縮されたパレントフッド)という概念を提案する。このパターンは台湾だけでなく、グローバル・サウス(発展途上国)のさまざまな地域に当てはめられる。

この概念には3要素がみられる。まず、台湾の圧縮・簡略化された経済・社会開発(急速な産業化と民主化が含まれる)は、世代間のモビリティと活発な市民社会の形成を導いた。台湾が権威的で貧しかった頃に幼少期を過ごした中産階級の親世代は、自分たちは「失われた子供時代」を過ごしたと嘆いている。彼らは育児の伝統的な在り方を変え、自分たちの子供に自立心を培い楽しい子供生活を送らせることを心に決めている。アメリカ文化の強い影響力のもとで、育児の在り方を変えることは、アイデンティティをどのように確立するかの目安となる。これをもとに、多くの両親は、家族の社会的地位の上昇と、自らがコスモポリタンであることを強調するのである。

それにもかかわらず、台湾の中産階級の親は、自分の子供にグローバル化された将来に期待し、それにばかり目が向いている。その多くは「グローバルな競争力を培う」ことを追い求める。子供たちを英語で学ぶ幼稚園、エリート学校、アメリカのサマーキャンプに戦略的に送り込む。子供がグローバルな文化資本を培うことを期待しているのである。

一方、「自然な成長にまかせる」という真逆の戦略をとる 親も増加している。この戦略をとる親は、両親や学校組織 の干渉が有害だと捉えている。それよりも、子供の「自然な 成長」に重きを置いている。このような親は、教科書と試験 を放棄し、西洋の教育学に則った代替的な教育プログラム を選択する。 圧縮されたパレンフッドの第二の側面を述べる。育児に関する文化的脚本には、グローバル化が見られる。一方、台湾の現実にはそぐわない場合が多い。例えば、子供と十分に触れ合い、コミュニケーションをとるようにと、親はアドバイスを受けることが多いが、ほとんどの台湾の職場は、家庭に優しい文化や組織体制ではない。共働きの親は、子供の面倒をみるのに学童保育を利用し、親戚を頼りにしている。「世代的隔たり」というナラティブがあるが、育児をする親は、同居している祖父母、または近隣に住む祖父母に育児の分担の頼むことがある。

さらに、親は自分たちの価値観と制度的環境との間が 乖離しているのに直面することがある。幸せな子供時代と いう考えを抱きつつも、自分の子供達が学歴競争の中で 生き残れる力をつけられるかを心配している。躊躇なく意 見を述べる子供達が、将来の台湾社会に適応できるかも 心配している。なぜなら、台湾には未だに集団主義と階層 型権威主義の文化が色濃く残っているからだ。

最後に、圧縮されたパレントフッドには、各々の階級に よって異なる特色がみられる。グローバル化と圧縮された モダニティによる経験は、親がどの階級に属するかによっ て異なる場合がみられる。経済資本と文化資本が十分に ある家族にとって、グローバル化は、さらなる機会と資源を 提供する。移動するだけの資本のない者にとってグローバ ル化は、不利益をもたらし、社会の周縁へと追いやってし まう。

最近数十年、台湾の資本流出と労働力流入は労働者階級の男性の雇用安定に多大な影響を及ぼしてきた。台湾の女性に好かれない男性は、東南アジアや中国からの外国人花嫁を求め、新たなグローバル家族をつくっている。さらに、新たな親になるという筋書き(家庭での体罰を禁止する罰則、両親の学校行事への積極的参加の推進)には、時間の融通がきき、子供とコミュニケーションを図れる親を前提として描かれている。労働者階級の親、移民の母親、社会的に不利な立場にある親は「非常に危険は家族」に分類されてしまう。

時間的・空間的圧縮という概念も用いることで、現代の台湾においてパレントフッドが、満足度が高いが、大変な努力を強いられる、いかに難しい事業なのかを説明できる。グローバル社会学の観点から分析すると、西洋の文献は育児のディスコースを、社会の内部に留まらせることで、家族を取り巻く文化的結びつきや、歴史的構成を看過してきた。グローバリゼーションという重要な文脈が、資本蓄積の育児戦略をどのようにフレーム化するか、それによって階級や地域ごとの不平等な幼少期が形作られるのを検証する必要がある。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Pei-Chia Lan < pclan@ntu.edu.tw > までお寄せください。

)崩壊のメイキング 21世紀の台湾

林 宗弘, 中央研究院(台湾), RC 28 社会階層論とRC39災害の社会学 会員

去30年の間、台湾は経済的、政治的、社会的に大きな変化を経験してきた。しかし、台湾に関する社会学的な文献は、未だに台湾の発展の成功にばかり焦点をあてている。世間の一般的通念は以下のようである。

- ・中国国民党(KMT)の権威主義的なテクノクラートに支配された、強く合理的な「開発志向国家」。テクノクラートは勝者を選択する政策のもと、産業を活発化させることを成し遂げた。
- ・農地改革の成功に基づいた輸出志向の(グローバル)経済の活発化。中小企業(SMEs)に支配された産

業構造も伴う。

・中小企業の起業、完全雇用、中間層の増大による社会的地位上昇率が高まる。

あまり明るくない話としては、台湾は伝統的な儒教 文化の影響から、家庭、教育、労働市場では性差に よる差別が根強く残ると、一般的に考えられていること だ。通常、この話は、普通の中間層による平和的で民 主的な変革がもたらされたとの終わり方をする(下記の 表を参照)。

しかし2007年以降、アジア金融危機や大恐慌によって、「台湾の奇跡」の解釈は疑問視されるようになっ

台湾開発についてにパラダイム変化		
	奇跡パラダイム	崩壊パラダイム
国家	独裁主義的、自立的、開発的	略奪、崩壊、民主化までの責任説明なし
経済	地元の民間中小企業が輸出志向経済を 支配	中小企業の消滅、独占資本の中国への 移動、中国の移民労働者の搾取
社会階層と社会移動	中小企業の起業、中間層の対等、社会移動率が高まり、失業率の低下	脱産業化と階級格差の増大、階級移動よりも階級再生産、若年層の失業率の上昇
ジェンダー、家族、人口	儒教的な父系家族、教育と労働市場に 性差格差、結婚の低年齢化、離婚率の 低下、効果的なバースコントロール	性差による格差の緩和、家族の崩壊、 アメリカ並の離婚率の上昇、出生率の低 下、人口の急速な高齢化
政治力学と分裂	KMTの独裁主義政党国家 vs. 現地の市 民社会、エスニシティと国民アイデンティティとの間の溝	民主主義的価値観の台頭、階級意識と若 者の間での世代間不公正の認識、中国の 影響に反発する太陽花学生運動

た。2008年に、前任の権威主義的なKMTのエリートが 政権に戻ったとき、テクノクラートは民主主義による混 乱と、独立政策を支持した民主進歩党(DDP)とを非難 した。KMT政権は自由主義経済的な政策アジェンダを 推進し、中国との貿易拡大を強調した。

最近の研究では、KMTの独裁政治は保守主義と政治腐敗を結合させ、SMEsと台湾人の政治参加の排除をもたらしたと、台湾の「開発志向国家」の考えが批判された。この研究は、中国の過剰な経済発展と、共産党国家が「独裁政治頼み」であることも着目した。経済が鈍化する文脈の中で、中国の中央政府と地方政府は、開発的というよりは略奪的にみえる。台湾の経験を再考すると、経済成長と強い独裁国家とを結びつける良い説明としては、経済成長によって独裁国家が出来上がったと考えられる。その逆ではない。一方、福祉国家・市民権レジームは、台湾が民主化された後に政治的な関心を集めるようになった。

1990年代初頭以降、台湾のグループ大企業が中国に莫大な投資を始めてから、台湾の産業構造は瞬く間に変化した。中小企業の輸出額のシェアは76%から18%に落ち込んだ。今日、台湾の輸出の82%は大企業が占めている。中小企業の支配は、独占と多国籍企業の資本に取って代わった。たとえば、大企業のフォックスコン・テクノロジー・グループの収益は、2013年の台湾のGDPの21%まで近づいた。フォックスコンの労使問題からわかるように、台湾の資本集中は、中国本土からの移民労働者と、中国の政党国家の独裁政治の土地収用によるものである。

台湾の産業構造の変化も、社会階層を再形成することに影響した。1990年代の都市部の中間層は、中小企業の事業主と熟練労働者で構成されていた。これが、階級上昇率を高めることになった。経済が鈍化すると、富と収入の格差が増大し、階級移動の度合いも低下した。他のポスト産業化社会でもみられるように、雇用安定が蝕まれ、職の不安定さが増し、ワーキングプアの数も増大した。

ただ1つの利点としては、性差による差別が緩和されたことが挙げられる。教育と収入の性差による格差は低下した。現在では、東アジアの近隣諸国に比べるとその差は、ほぼなくなっている。しかし、労働市場と家庭における性差格差は改善されていない。面白いことに、女性は結婚することで不幸せになるとの研究結果もある。実際、台湾人の女性雇用者は仕事を続け、自立性を保持し、自らの収入を得るために、結婚と妊

娠を避ける傾向がある。このことによって、結婚率の低下、アメリカと同じくらいに高い離婚率へとつながり、世界的にみても出生率の低い国家となった。

このような経済的・社会的変化は、台湾の政治的な 展望を新しい形にした。政治学の文献には、KMTの政 党独裁主義政党と、現地の市民社会との闘争に焦点 をあてたものが多い。しかし、1990年代に民主化の動き があってから、経済格差と世代間不公正の増大によっ て、新たな政治的な溝が生じた。選挙研究の中には、 主にブルーカラー労働者、農民(主に男性)、自由主 義的な価値観のある台湾の若者によって、DDPは支持 されているとの報告がある。

2008年以降、KMT政府は中国の政党国家と協調することで、経済の活性化を試み、台湾と中国の大企業とが協力して取り組むことを奨励してきた。呉介民が"cross-strait states-businesses coalition of authoritarian capitalism"(独裁主義的資本主義による中国・台湾間のビジネス協定)と造語したのは、自由貿易計略を通じて、台湾と中国との経済・政治統合が行われる疑いがあったからである。KMTの独裁主義政治をノスタルジアに駆られることで、政府はこの計略を、新自由主義的な「トリクルダウン」イデオロギーでもって押し進めた。この計略によって、年来の国民性、階級、世代の間の緊張が高まったのだ。

台湾の変革は開発モデルとして、実際の姿を偽っている。長年、開発は国家成長の原動力としてみられてきたが、台湾の中小企業は消えつつある。大企業の社員とKTMのテクノクラートが、自由貿易と中国開放路線を支持している。彼らは強い国家によって支えられている。台湾の若者は失業し、社会的地位は下がり、不安定雇用、ベアアップの頭打ち、税金と社会保険料の利率アップに直面している。予想外にベストセラーとなり、太陽花学生運動を起こす切っ掛けになった本の中では、このような社会変化によって、階級格差の拡大へと続く世代間の闘争を激化させと書かれている。論じられている。以前の経済的奇跡とは相反し、そのうちに訪れる社会崩壊に着目する若手研究者は、台湾社会学のパラダイムシフトを呼びかけている。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Thung-hong Lin <<u>zoo42@gate.sinica.edu.tw</u>> までお寄せください。

¹ Thung-hong Lin et al. (2011) A Generation of Collapse: Crises of Capitalism, Youth Poverty and the Lowest Fertility Rate in Taiwan. Taipei: Taiwan Labor Front.

〉台湾社会学の発展

~普遍性と特殊性~

張 茂佳, 中央研究院(台湾), RC 05 人種、国家、エスニシティ関係 会員

湾社会学の現状を全て話すのは不可能だ。代わりに、台湾でどのように「社会学が実践されている」かについて説明することにしよう。直近に開催された台湾社会学会(TSA)年次大会(2014年11月)についてから始めよう。過去20年間、TSA年次大会は会員にとって重要な行事であった。現在、TSAの会員数は500人にも上る。今年は清華大学で開催され、64の部会で180の論文が発表された。内容としては、政治経済、ポストモダン的主体性、東アジアのフォーラム、中国の変革などが挙げられる。日本社会学会と韓国社会学会からの特別講演者や、香港の大学に勤務している中国の学者も招待された。

今年の大会プログラムの目玉となったのが基調講演であった。慣例に従わず、今回はYang Wei(ヤン・ウェイ)という若い大学院生に講演を依頼した。講演内容は、彼の政治活動と、「太陽花運動」(何明修の論考を参照)として知られる立法院の建物を占拠した学生運動についてである。この慣例にとらわれない講演は、台湾の社会学者の一般的な見解を示している。台湾の社会学者の多くは、格差、民主主義、正義、市民権についての議論を真剣に重ねることで、伝統的なパラダイムに挑んできた。

しかし、他の地域でもみられるように、TSA会員の中には、相反する社会的立場や政治立場の者もいる。そのため、社会学的想像力や社会学的実践力も異なる。年次大会会場の廊下では、占拠運動を公然と支持するように思われる行動を、おおっぴらに非難するTSA会員もいた。TSAを社会活動に結びつけることで政治化することを危険視する会員もいた。また、TSAが政治化することで、学会組織の専門家的立

場を苛め、TSAの学術組織というアイデンティティを傷つけるのではないかと危惧する会員もいた。

しかし、TSAは政治活動の上でも重要である。例えば、TSAは著名な査読学術誌 Taiwanese Journal of Sociologyを半年ごとに刊行している。さらに、ニューズレター、Streetcorner Sociology (王宏仁の論考を参照)という人気の高いブログも運営している。このブログでは、実証研究結果や時事問題の論争について、すぐに知ることができる。

TSA会員は、台湾フェミニスト学会、文化研究学会、台湾社会福祉学会、台湾科学技術社会学会を含めた他の学会の会員でもある。他の研究題目と近隣の学問分野との「転回的」で「クレオール化」した関係によって、TSAは社会学とそれ以外の社会科学分野に知的エネルギーを提供している。

次に、台湾の社会学者の興味のある研究分野について、過去10年間に刊行された3編を取り上げることで、その内容を記そう。それぞれの編著には独特のスタイルが見られる。一つ目は伝統的、または「主流派」、2つ目は「トランスナショナル化」、またはグローバル化、3つ目は「公共的な」タイプである。限られたものだけを選抜したが、全ての編著は幅広い層に受け入れられ、このような分野の代表的な刊行物と言える。

Social Change in Taiwan, 1985-2005: Mass Communications and Political Behavior (M. Chang, V. Lo, H. Shyu編著, 2013)は、台湾社会学の主流派の著作と言えよう。この著書には、台湾の民主主義化時代における政治参加とマスコミの変化を検証した論考

今日の社会学は 社会に有機的に 組み込まれている"

がある。これらの研究は、台湾社会変遷基本調査(Taiwan Social Change Survey (TSCS))によって、1989年以降に集められた全国サンプルデータを基に報告している。この調査によって、市民権、国民アイデンティティ、宗教、性差、家族、雇用、グローバル化、主流社会学の重要な概念の時系列的変化を知る上で有用な「一時の傾向」がわかる。2002年以降、国際社会調査プログラム(ISSP)と東アジア社会調査(EASS)のモジュールも含まれている。このデータは、世界中の研究者が利用でき、比較研究を行う際に有益である。

To Cross or Not to Cross: Transnational Taiwan, Taiwan's Transnationality (H. Wang, P. Guo編著2009)は、台湾社会学の「トランスナショナル的」な特徴について検証している。著書の中で、社会学者、人類学者、歴史家は、現代社会の高移動性や活発なグローバル化という文脈の中では、「国民国家」という枠組みを越えて考える必要性があると述べている。この編著は、台湾の視点から社会的・地理的境界線を越えたヒト、文化、資本の移動に関する新興学問が説明されている。全体として、編著の論考は、従来当然と考えられていた社会領土の概念に挑むものもある。テーマの中には、東南アジアからの女性の家政婦労働者、台湾仏教協会のグローバル的展開、移民の結婚にみられるアイデンティティと性差問題、中国と台湾の狭間にとらわれた台湾ビジネス関係者などである。

台湾社会学の公共的な系統としては、最近、発刊されたStreetcorner Sociology (H. Wang編著, 2015)が代表的である。この著書には、寄稿者37人からの34の論考が掲載されている。寄稿者は一般読者向けに平易な言葉で、社会学の調査結果や理論に関する短いエッセーや論評を書くようにとの依頼を受けている。エッセーの内容だが、政治生活、つらい人生、性差問題、周縁部の生活、代替的方法という5つのテーマに分けられている。全ての論考はStreetcorner

Sociologyのブログに最初は掲載されたものである(王 宏仁の論考を参照のこと)。2014年2月にFacebookのアカウントが作られ、一ヶ月もしないうちに3000以上の人がサイトを訪問した。2014年には、それぞれの論考は平均して6700のヒットがあり、同時期の他のサイトと

比較しても非常に多いヒット数であった。全ての論考がパブリック・ドメインにあるにもかかわらず、紙媒体の著書は、台湾の社会科学関連のどの著書よりも売れている。

過去には、台湾社会学には独自性がみらず、西洋社会学に頼り切りであるとの批判があった。20年前を振り返ると、確かにそうだった。しかし、その後の世代の社会学者は、多くの挑戦に挑んできた。その中には、権威主義的な国家に吸収される圧力、文化的保守主義者から向けられる疑念の目、西洋の影響力を前にして社会科学を現地化するかについての議論、中国中心主義と台湾中心主義の間で起こるパラダイム論争などがある。今日では、社会学は社会の中に有機的に組み込まれている。社会学には、公共のための知識の促進という役割も含まれている。高校の教育やマスコミが使う言葉の中に、階級、階級再生産、国家、支配、権力、社会運動、ジェンダー、市民社会、市民権、グローバル化などの大きな概念が使用されるようになった。

このような成功があるにもかかわらず、新たな挑戦が迫っている。その一つは、人口の高齢化と18歳人口の減少である。もう一つの挑戦としては、市場原理主義とグローバル化競争の広範囲に及ぶ権力である。社会学者と社会学系機関は、研究実績の評価を統一化するようにと、行政部から圧力をかけられている。研究業評価を他分野と統一することで、人文学や無用と思われる社会科学の分野からの資金を断つ根拠にできるからである。さらに、全ての挑戦は格差が深まる時代に起きている。しかし、このようなことは、台湾社会学が他の地域の社会学とは異なることを示すわけではない。だから世界の社会学者よ、未来へ向かって共に前進しよう。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Mau-kuei Chang <<u>etpower@gmail.com</u>> までお寄せください。

〉街角の社会学

王宏仁,中山大学(高雄市,台湾), RC 31 移民 会員



挿絵: アルブ

在の台湾の学術環境の中で、専門知識を広めることは容易な仕事ではない。大学の執行部はこのような「生産性のない」仕事を奨励しない。公共問題のリスクに係りたい社会学者は「学術的でない」と非難されている。自分自身のブログを書く学者もいるが、非常に多くの時間を要するので長くは続かない。

2009年、数人の台湾の人類学者は、人類学者の研究を広めるために毎週短い論評を載せるguavanthropology(芭樂人類學)呼ばれるブログを試みた。そのブログは、最初の数年はあまり注目されなかった。しかし、guavanthropologyは社会学コミュニティの模範となった

台湾の社会学者によって支持されたStreetcorner Sociology (街角の社会学)は、2013年2月にデビューした。2年の間で、100人以上の台湾社会学者によって書かれ、130以上の投稿を掲載した。220万の閲覧があった。そして、ブログの投稿の多くは、さまざまなマスメディアに再投稿されていた。

Streetcorner Sociology が開設される前、数年間で何百万ものヒット数を得たPanSci や Mapstalkのような人気のある科学ブログがるあことを、台湾では誇りに思われていた。言うまでもなく、今日の最新情報を得ようとしている人々は、ネットサーフィンするようになった。それゆえに、もし社会科学者が公の意見や社会の政治に影響を及ぼしたいのならば、インターネットでの議論に参加しなければならない。さらに、多くの人々は長い記事を読めなくなった。ある出版社によると、3~5分の間で読み終えることができる短い記事がインターネット読者にとって最適な長さであった。それ

にゆえに、当初から、Streetcorner

Sociologyの投稿者は、中国語で5000文字、英語で1500語以下の投稿を書くように勧められている。新聞の論説文には長すぎるが、公の場で議論に展開させるブログ投稿にとっては十分な長さである。

Streetcorner Sociologyの成功のカギとなった要因 は、台湾の社会学コミュニティから広い支持を得られ たからである。日本社会学社会の会員は3000人以上 いる一方で、韓国社会学会の会員は1000人以上あ る。それに比べて、台湾は、アクティブだが、社会学 者の数は300以下である。韓国社会学会のさまざまな 小委員会は、さまざまな題材(移民や社会理論など)の 教科書を書くことで、社会学の知識を広められる。日 本でも同じように、重要な社会学的な問題を取り扱う 社会学入門書のシリーズがある。明らかに、このような 取り組みは、小さな台湾の社会学コミュニティの能力 の範疇を越えている。さらに、さまざまな分野の社会 学者に論評を書いてもらうことで、集団で書いてもらう のだが、社会学の寄稿文を幅広い方々に読んでもら う効果的なチャネルを提供している。小さな共同体な ので、社会学者は互いを知っている場合が多い。ま た、台湾人の社会学者の多くは、約2年ごとに、短い 評論を書くことを快く引き受けてくれることもわかった。

過去数年の間、大衆は社会問題や政治問題に関心も持ち始めたのだが、これがまた、ブログの評判に貢献した。例えば、経済のグローバル化により生じた問題への不満、中国の発展、現在の保守的な右派の政府により、2014年3月に大きな学生抗議運動が起こったことなどである。議会占拠と抗議の50日間、Streetcorner Sociologyは運動を支持する17以上の投稿を掲載した。そして、約10万人の訪問者が毎日ブログを観た。先月と比べると、訪問者の数は1700人多い。ブログは、運動の支持者が公共政策につい

て議論できる重要なサイトとなった。政府職員でさえ、 自分たちの政策を守るために、ブログにアクセスして いた。

Streetcorner Sociologyは、台湾の社会学、もしくはその地域の中で社会学的、政治的な発展に関心のある人々にとっての窓となった。Streetcorner

Sociologyが、より知られるようになるにつれて、さらに多くの高校生が社会学という学問を理解するためにブログを読んだ。これは重要である。過去に、社会学は社会福祉学と、しばしば混同されたからである。さらに、台湾の他の新聞メディアは、ブログに発行された投稿内容を報道している。これによって、学術的なパースペクティブに世間の注目が集まっている。ブログの投稿は、中国や香港のウェブサイトが再投稿していた。当然と言えるが、中国のウェブサイトは主に芸術の社会学、観光事業、コミュニティ発展のように、政治に関与しない話題を取り扱っている。それに対して、香港のブログは政治問題に関心を寄せていて、国家と子供時代、香港、台湾、中国に関する問題を取り上げている。

ほとんどの学術論文は10人以下の人々に読まれている。社会科学の学術論文のうち1/3は引用されていない。もし、我々の時間のかかる研究が、読者を、つまり私たちの同僚でさえも、惹き付けないとすれば、とても失望的であろう。それと比べて、Streetcorner Sociologyの例を考えてみると、共同作業には社会的インパクトがあることがわかる。また、社会学者が学問研究を犠牲にすることなしに、積極的に社会問題に参加することができるのを証明している。■

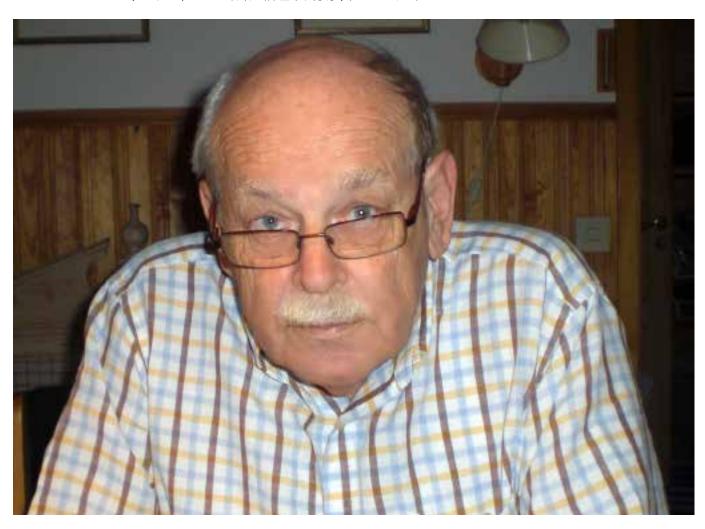
(翻訳: 眞武 佳奈子)

ご意見・感想・質問等はHong-Zen Wang <<u>hongren63@gmail.com</u>> までお寄せください。

>ユルゲン・ハートマン

熱心な国際主義者

リュミドラ・ナース, Oxford XXI Think-Tank 共同創立者, 理事長, (イギリス), RC 34 若者 前理事会委員 シルビア・トルンカ, RC 34 若者 前理事会委員 (オーストリア)¹



ISA リサーチ・コミッティ 若者の社会学会長 (1986-1990)とISA 財務担当副会長(1994-1998)を務めたユルゲン・ハートマンは、2015年3月2日に永眠

で優し 持ち、 止め、

つも明るく、気さく で優しく、広い心を 持ち、誰でも受け 止め、積極的で、

協調性があり、いつも助けてくれて、 心が温かく、理解力があり、国際的 に活躍する科学者で、腕のたつオ ルガナイザー、感銘高い人柄。友 人と同僚らは、ユルゲン・ハートマン を、このように思い出すだろう。2015 年3月2日、彼はこの世を去った。

1944年3月18日に、ユルゲンはド

イツのレムシャイト=レンネップで生また。父親は戦死したため、母親に育てられた。子供の頃、地元の本屋でユルゲンは時間を過ごすことがおおかった。彼は貪欲な読書家だったので、本屋の主人とすぐに仲良くなった。本屋の主人は、店の奥で本を無料で読ませてくれた。ユルゲンは吸収できるものは何でも吸収した。他国や文化について読み、地図や列車の時刻表までも勉強した。この事が、彼を勉学の道に導き、世界を旅

してみたいという欲望へとつながった。勉学の志があることから、彼は稲妻のような速さで本を読んだ。また、人間コンパスのように、どこにいようとも迷子になることはなかった。フルタイムで働いている母親の子供だったので、子供の頃からユルゲンは料理が上手で、生涯を通してその腕を磨き続け完璧なものにした。

1969年に、ユルゲンはコローニ ュ大学より経済学修士の学位を授 与した。学生の頃、彼はストックホル ムで夏休みの間だけアルバイトをし ており、ウップサラ大学から種学金 を得た。その大学で、将来の妻とな るソルフェイフと出会った。1973年、 スウェーデンの学生運動に関する 博士論文を提出し、博士号を授与 した。大学院を修了後、ウップサラ 大学の社会学部で1993年まで勤務 した。その間、スウェーデンの各地 で講演した。1980年から1982年の 間、ウィーンで国際連合の傘下組 織である欧州社会福祉訓練調査セ ンターで研究代表者として勤務し た。1983年から1986年の間

Integration of Youth into Societyという国際プロジェクトを指揮した。これを切っ掛けに、国際的なキャリアを積み始めた。

ユルゲンがISAに初めて係った のは、1978年のウッパサラ市で開催 された第9回ISA世界社会学会議の 時である。ISAの代表秘書のIzabela Barlinska(イザベラ・バルリンスカ) は、案内所でのユルゲンとの出会い を、次のように振り返る。当時のイザ べラはまだ若く、会議事務局の仕事 を手伝う学生だった。当時のユルゲ ンも若く、ウッパサラ大学で教鞭をと っていたが、開催地のアカデミック・ コミュニティの代表として、自らの助 けが必要ではないかと感じていた。 確かに必要だった! ユルゲンとイザ ベラは経験不足で、ISAの組織もよ く理解できていなかった。しかし、両 者とも他の人々を助けたい気持ちで

いっぱいだった。その後、2人は良い友人になった。

さまざまな国々からの同僚らと国 際的な舞台で仕事をすることは、ユ ルゲンにとって、活力となった。彼は 「若者の社会学」(RC34)というISAリ サーチ・コミッティに加わり、1982年 から1986年の間、会計監査として働 き、1986年に会長に選ばれた。前任 者のPetar-Emil Mitev(ペーター・エ ミル=ミテフ)は次のように述べた。「 ユルゲンはRC34を協同の場にする というモデルを作ることに貢献した。 つまり、RC34を冷戦時代の西欧と東 欧の若者を研究する学者らが交流 を図る場として提供することである。 東欧の若者研究者は、ユルゲンが 共通の学術目標に向かうために誠 心誠意に助けてくれ、彼の良く考え 抜かれた支援が施されることを、常 に期待することができた」と述べた。

「ユルゲンがRC34でのリーダーシップをとっていたのが、ちょうど政治的過度期であったことで、グラスノスチやペレストロイカによって、ソ連の若者が置かれた状況の変化を、観察し理解することができた」とJohn Bynner(ジョン・バイナー)は言った。彼はユルゲンと共に European

Youth and New

Technologies (1987-1990)という比 較研究を行った時に、ユルゲンの優 れた分析力と深い考察力に感銘を 受けた人物である。このプロジェクト はウィーンのEuropean Coordination Centre for Research and Documentation in the Social Sciences で運 営されていた。RC34に支援されるこ とで、このプロジェクトには、ベルリン の壁崩壊からソ連邦崩壊という内容 が含まれており、希有な価値が見い だされていた。バイナーはユルゲン を「真の国際主義者」だったと、次の ように述べた。「ユルゲンは、私のよ うな造詣の深くない者にも、狭量な 国粋主義的な視点から抜け出し、 文化に基づいた仮説や国家の優先 事項の相違性を理解する方向へ目

を向けることの必要性を痛感させて くれた。特に、東欧のように非軍事 化もみられず、消費者のIT技術へ の興味も低い地域では、この考え方 は重要である。IT力の需要拡大や 国外メディアへのアクセスを通じて、 若者は次世代として、変化の先駆者 になりつつあった。当時のユルゲン が言っていたのだが、コンピュータ 技能証明書や運転免許書の有無で さえも、当時の東欧諸国にとっては ユートピアであった。この発言は、今 となっては評価し難い。ユルゲンは 当時から、新技術を通じて、大人へ と変化することに気づいていた。そ して、この重要性を説いていた。グロ ーバル世界でよくみられる個人化、 両極化、格差拡大は、この結果によ って生じたものだった。若者の政治 性や政策の要として、今日の我々が 格闘するものの大部分は、我々の 大事なユルゲンの影響が強く及ぼさ れている。」

真の国際的な科学者として、 ユルゲンはRC34傘下のもと、中国 の若者研究を専攻する研究者と、 連携を図ることを成し遂げた。ユル ゲンがRC34会長を2期務めた時、 中国の研究者がアジア担当副会 長を務めたのは、偶然ではなかった。1993年の上海で「アジア型近代 化と若者」という中国で最初のRC34 会議が開催されるまでの交渉過程 で、ユルゲンは重要な役割を担って いた。

ユルゲンのネットワーク力もまた素晴らしかった。Helena Helve(ヘレナ・ヘルブ)は、ユルゲンが北欧の若者研究の先駆者であると考えている。彼女は、1998年から2004年の間に北欧若者研のコーディネータを務め、2002年から2006年にRC34会長を務めた。次の出来事が、ヘレナの心に鮮明に残っていた。「北欧若者会議で、1960年代と1970年代における欧州の若者研究運動に関する、ユルゲンの基調講演が素

晴らしかった。ユルゲンは北欧若者 研究者の共同研究を活発に進めて くれました。彼は Nordic Youth Research Symposium NYRISと北欧若 者共同研究の創設者の1人です。 国際的に著名な科学者になった時 でも、彼は自分を北欧の若者研究 者として捉えていました。彼の仕事 が国際的に評価されるようになって から、北欧の若者研究が世界各地 に知れ渡るようになったのです。」 ユルゲンはCYRCE (Circle for Youth Research Cooperation in Europe) 一員でもあった。この研究会は、彼 の前任者のSibylle Hübner-Funk(シ ビル・ヒューブナー=フンク)が、1990 年に設立したものである。CYRCEに よって、ヨーロッパの若者研究の土 台を作り強化することが可能になっ たのである。

ユルゲンの幅広い知識、教育経験、複雑な問題を簡素に説明できる力は、彼を講演者として人気者にした。彼の発表のスタイルには特別なものがあった。大人数に対する講演であったとしても、聴衆はあたかも自分だけに話かけられているかのように感じた。

RC34会長の任期満了後、ユルゲンはISA執行委員会の委員に選ばれた。1990年から1994年の間、ユルゲンは財政委員会の委員に就き、1994年から1998年は財政担当副会長を務めた。この任期中、ユルゲンはISA世界会議の運営を補佐し、1994年のビーレフェルド、1998年のモントリオール、2002年のブリスベンでの会議を開催し、世界中から社会学者を招き寄せた。

若者研究の他に、ユルゲンは、 自身の経験と外部に発信すること を通じて、国際理解を高めることに

強い情熱を注いだ。ユルゲンは、 若者が旅行すること(交換留学から 観光を含む)は重要だと考えてい た。Lyudmila Nurse(リュドミラ・ナ ース)は1992年10月のモスクワで の出来事を鮮明に覚えている。モ スクワで、彼女はYouth and Social Changes in Europe: Integration or Polarizationという国際会議を開催し た。会議の初日に、Youth Institute の責任者に、当時の科学技術省か ら電話があった。当局はロシアの若 者に関する新政策の立案に係って いた。省庁職員は、会議に参加して いる西洋の学者と面会を申し込んで きた。ユルゲンはロシア政府が会議 に興味を抱いてくれたことを非常に 喜んでいた。我々はクレムリンに招 かれ、非常に感動した。クレムリンで は、ゲンナジー・ブルブリスが迎え入 れてくれた。当時、彼はロシア連邦 の国務長官であり、ボリス・エリツィン 大統領の次に強い影響力を持つ政 治家として知られていた。ミーティン グでの焦点は、ロシアで民主主義を 確立する過程において、若者の参 加をどのように促すかということであ った。まず、ユルゲンが最初に答え た。その答えはシンプルで実直だっ た。「ロシアの若者が世界を見られる ように自由な渡航を許可すべきであ る」という答えであった。最初は皆、 非常に簡単なことだと思った。そし て、ユルゲンは「若者が戻ってくるよ うな魅力的な国に変化する必要が ある」と付け加えた。ミーティングで は活発な意見交換あった。若者の 移動性のメッセージが好意的に受 け止められたという満足感を、ユル ゲンは抱いた。

ユルゲンの若者の移動性と旅行 に関する仕事は、この分野における 若者研究を形作る上での重要な役 割を果たした。彼は若者が旅行する 理由を体系的に分析し、若者旅行者をプロファイル化した。西欧の若者の移動性と旅行に関する仕事の中で、彼はEU政策と「若者の移動性」という概念を、ヨーロッパ人としての意識と経済、政治、文化の有益な協同に結びつけた。例えば、教育機関の留学プログラムよりも、ヨーロッパの鉄道パスの方が、スイスの若者の「ヨーロッパ人」という感覚を与える影響が強いこと、若者が旅行したいという意思と、外国語の会話力との間に相関関係があることなどである。

欧州にある5大学とダラールナ大学がEuropean Tourism Management (ETM)というプログラムを開設する協定を結ぶことになった時、ユルゲンは観光学を自分の仕事の一つにするというチャンスを掴んだ。1994年から2008年、ユルゲンはスウェーデン側の修士課程の責任者に着任した。彼は学生を教えるのが大好きで、退職後も講義をし続けた。

ユルゲンは、多くの素晴らしい友人や同僚、多くのRC34会員にとって真の友であった。彼のチーム精神、陽気な笑顔やハグ、心温まる笑い声、探究心、機智に富んだアドバイス、激励。もう二度とないのかと思うと残念である。彼が遺した偉大な遺産を、我々が引き継ぐことで、我々の仕事と記憶の中に、彼は永遠に残るだろう。■

(翻訳: 山元 里美)

ご意見・感想・質問等は Sylvia Trnka <<u>sylvia.trnka@aon.at</u>>とLyudmila Nurse <<u>lyudmilanurse@oxford-xxi.org</u>>までお寄せください。

¹ Izabela Barlinska, John Bynner, Helena Helve, and Petar-Emil Mitev に感謝申し上げます。